

真田氏館跡

1992

長野県真田町教育委員会

真田氏館跡

—史跡整備に伴なう発掘調査報告—

1992

長野県真田町教育委員会

序

この報告書は、真田町の長期振興計画事業による、長野県史跡・真田氏館跡を中心とした公園整備に伴って、実施した発掘調査の遺構確認事項、その他関連する諸資料をまとめた報告書であります。

文化的精神は、日々止むことなく育まれ前進していくものと考えます。その向上発展が個々の人の生活に有益であるばかりか、社会全体の躍進につながるのは言うまでもありません。文化的産物や文化現象に触れ、再確認するなかで琢磨され、真に培われていくものと思います。

埋蔵文化財は、過去の人々が現代に残してくれた文化遺産であります。私たちは、これらの文化遺産を発掘し、様々な視角から調査することで、失われた過去の生活ドラマを知り得ることができます。時には高度な技術の遺物出土に驚嘆し、また貴重な習俗の消滅に痛惜することもありますが、これらを通して、現代文化が、過去繰り返されてきた先人の生活を経て成立していることを肌で感じることができます。

過去を振り返ることで、現在の文化に新しい価値観を見出し、将来の文化向上に役立つことを信じて止みません。

このたび、発掘調査いたしました真田氏館跡は、真田町本原御屋敷地籍に位置し、その名の残るとおり、古くから真田氏の屋敷跡として周知されるところの、県内における貴重な中世豪族の居館跡であります。

申し上げるまでもなく、真田氏は戦国の世に名を馳せた武将であり、その武勇伝に思いをよせて、この地を訪れる人々も多くおります。

しかしながら、真田氏館跡は、本格的な調査を受けないまま今日に至っておりますので、今回の調査は、ひろく注目されているところであります。

この発掘を機に、ここに報告書が刊行されましたことで、今後の保存に、研究の端緒に、そして文化財に対する正しいご理解にと、何らかのお役になりますならば、望外のよろこびであります。

最後になりましたが、この期間にわたって多大なご指導とご援助を賜わりました、長野県教育委員会、國學院大學ほか、ご協力を賜りました各位にたいしまして、心から感謝を申し上げる次第であります。

平成4年3月

真田町教育委員会教育長

松尾一久

例　　言

1. 本書は、長野県小県郡真田町大字本原字御屋敷に所在する真田氏館跡遺跡の発掘調査報告である。
2. 本調査は、真田町が史跡整備事業として、國學院大學文学部講師青木豊を团长とする真田町真田氏館跡遺跡調査団に委託して実施されたものである。
3. 発掘調査は、平成2年12月16日から同21日までの6日間(第1次調査)、平成3年4月22日から同年5月7日までの16日間(第2次調査)に亘って実施された。
4. 本書に掲げた遺跡実測図等におけるレベルは海拔を示し、方位は磁北を指示する。
5. 本書各項目の執筆者は文末に記した通りである。
6. 遺物の整理にあたっては、可児通宏氏、國學院大學文学部助手 谷口康浩氏から御助言を承った。
7. 遺跡における写真撮影は内川隆志、粕谷崇、下平博行がを行い、遺物写真は河合修が担当した。
8. 本書の作成は河合修、内川隆志を中心に調査員全員でを行い、青木豊が統括した。

真田氏館跡調査団組織

顧　問	加藤有次	國學院大學文学部教授
	小林達雄	國學院大學文学部教授
團　長	青木　豊	國學院大學講師
副　團　長	内川　隆　志	國學院大學考古学資料館学芸員
參　　與	児玉　卓　文	長野県教育委員会文化課主事
主任調査員	粕　谷　崇	國學院大學文学部助手
	河　合　修	國學院大學大学院博士課程前期
調　査　員	中　川　佳　三	國學院大學考古学資料館嘱託
	下　平　博　行	國學院大學大学院博士課程前期
調査補助員	高橋　真実、山本光明、白木紀子、間口牧子、塙田奈司、岡　稔、大熊季広、 加藤憲子、水本和美、黒石ア矢子、小鹿勝也(國學院大學生)、橋本真姫	
整理補助	岸　崎　浩　実	國學院大學大学院博士課程後期

本文目次

序

例　言

第Ⅰ章　調査に至る経緯	1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境	2
第1節　地理的環境	2
第2節　歴史的環境	3
第3節　周辺の遺跡	5
第4節　遺跡の状況	8
第Ⅲ章　調　査　経　過	9
第Ⅳ章　層　序	10
第Ⅴ章　遺　構	11
1. 大手門	11
2. 握手門	11
3. 木戸口	16
4. 水路状石積造構	17
5. 土壘	17
6. 堀	18
7. 土止め石積造構	18
8. 眼	18
9. 東側曲輪(主郭)西端における版築状況	18
第Ⅵ章　遺　物	31
第1節　中世の遺物	31
1. 土鍋	31
2. 鉢	31
第2節　その他の遺物	33
1. 繩文時代の遺物	33
2. 平安時代の遺物	41
3. 銭貨	43
第Ⅶ章　ま　と　め	43
第Ⅷ章　付編「真田町大字本原字殿蔵院採集資料について」	45

本文挿図目次

- 第1図 真田氏略系図
- 第2図 周辺の遺跡
- 第3図 真田館跡周辺分筆図
- 第4図 トレンチ配置図
- 第5図 遺構配置図
- 第6図 大手門石積遺構
- 第7図 握手門石積遺構
- 第8図 木戸門石積遺構
- 第9図 水路状遺構
- 第10図 木戸地区Cトレンチ石積遺構・土壘セクション
- 第11図 堀跡セクション
- 第12図 曲輪地区Fトレンチ石組遺構
- 第13図 跪跡遺物出土状況及びセクション
- 第14図 跪地区Bトレンチ遺構配置図
- 第15図 曲輪地区Gトレンチ東側版築状況
- 第16図 平安時代・中世の遺物
- 第17図 繩文土器(1)
- 第18図 繩文土器(2)
- 第19図 繩文土器(3)
- 第20図 繩文土器(4)
- 第21図 繩文土器(5)
- 第22図 繩文時代の石器
- 第23図 銭貨

付編挿図目次

- 第1図 遺物採集地点位置図
- 第2図 採集遺物(1)
- 第3図 採集遺物(2)

本文写真図版目次

- 図版 1 1. 遺跡遠景
2. 曲輪地区調査前景
- 図版 2 1. 曲輪地区・厩地区調査前景
2. 曲輪地区トレンチ設定状況
- 図版 3 1. 大手門調査前景
2. 大手門調査前景
- 図版 4 1. 大手門石積遺構検出状況
2. 大手門石積遺構検出状況
- 図版 5 1. 拠手門完掘状況
2. 拠手門石積遺構検出状況
- 図版 6 1. 拠手門石積遺構完掘状況
2. 水路状遺構検出状況
- 図版 7 1. 水路状遺構完掘状況
2. 水路状遺構完掘状況
- 図版 8 1. 水路状遺構石積状況
2. 廓跡完掘状況
- 図版 9 1. 厩地区Bトレンチ完掘状況
2. 厩地区Bトレンチ土層堆積状況
- 図版10 1. 廓跡土堤構築状況
2. 厩地区Cトレンチ遺物出土状況(土鍋)
- 図版11 1. 曲輪地区F-1トレンチ完掘状況
2. 曲輪地区F-1トレンチ石積状況
- 図版12 1. 曲輪地区F-2トレンチ遺物出土状況
2. 曲輪地区Gトレンチ東側版築状況
- 図版13 1. 木戸地区調査前景
2. 木戸地区Cトレンチ完掘状況
- 図版14 1. 木戸地区土堤構築状況
2. 木戸地区Aトレンチ完掘状況
- 図版15 1. 木戸地区Aトレンチ石積状況
2. 調査風景

- 図版16 縄文土器(1)
縄文土器(2)
- 図版17 縄文土器(3)
縄文土器(4)
- 図版18 縄文土器(5)
縄文土器(6)
- 図版19 縄文時代石器
平安時代土器
- 図版20 中世土器(土鍋・鉢)
- 図版21 中世土器(土鍋)
土鍋陰刻文様細部
- 図版22 中世土器(土鍋、内面)
中世土器(土鍋、底面)
- 図版23 中世土器(鉢)
鉢陰刻文様細部

付編写真図版目次

- 図版1 縄文土器
土師器(环・甕)
- 図版2 土師器(甕)
須恵器(环)
- 図版3 須恵器(甕、表)
須恵器(甕、裏)

本文付表目次

- 第1表 銭貨觀察表

第一章 調査に至る経緯

真田町は、昭和63年に町政施行30周年を迎えた。あわせて、新しいふるさとづくりをめざした第3次長期振興計画の策定をみたが、奇しくも国の進める「自ら考え自ら行う地域づくり事業」と、ときを同じくしてのスタートと重なった。

町の長期振興計画は、このいわゆる「ふるさと創生事業」の趣旨に添うものであったため、真田町にとては正に時宜を得た事業となつた。

ふるさと創生事業の内容決定にあたっては、町民各層からの声を広く取り込んで行くこととし、広報紙によるアイディア募集等を行つた。その結果様々なアイディアが寄せられ、庁内に設置した「ふるさと創生事業審査委員会」で慎重審査が行なわれた。その中で特に要望の強かった、次のふたつの事業を実施して行くこととなった。

ひとつが「後世に残る文化遺産の整備事業」であり、ひとつは「入づくり事業」である。

そして、この「後世に残る文化遺産の整備」が、町名の由来ともなつた、戦国の武将、真田氏の居館跡、通称「お屋敷」及び、その周辺整備である。

お屋敷の整備は、町の長期振興計画の基本方針の一つである「やすらぎがあり誇りと愛着がもてる町づくり」のシンボル事業にふさわしく、地域住民が永い伝統に培われた独自の文化に誇りと愛着をもち、真田町のすばらしい文化を伝承する必要がある、とした指標に添うものである。

専門的学識経験者はもちろん、地元有識者を交えて、整備計画を検討するなかで、事業については、平成元年度から着手し、お屋敷の周辺部を含めての公園化をすすめ、平成4年度の完成をめざすことになった。

しかし、真田氏居館跡は、昭和42年長野県教育委員会告示第6号をもって指定された長野県史跡であり、中世豪族の居館跡としての特徴が残る貴重な遺構である。このことから、文化財保護を重視した町教育委員会は、県教育委員会文化課と共に対応策を協議した。

この結果、お屋敷及びその周辺の保護整備については、町教育委員会が発掘調査により遺構の確認調査を行い、その成果をふまえた整備することになった。

そこで、國學院大學考古学資料館、青木豊先生を団長とする発掘調査団を組織し、平成2年度第1次、平成3年度第2次発掘調査を実施するに至つた次第である。

(羽毛田克信)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

真田町は長野県の東部、小県郡の北端に位置し、南は東部町・上田市、西は埴科郡坂城町・更埴市、北は長野市・須坂市、東は群馬県吾妻郡嬬恋村にそれぞれ接し、総面積181.90km²を有する。町の北東部には四阿山(2,332.9m)、根子岳(2,128m)等の高峰が連なり、山麓には菅平高原が広がっている。

四阿山を源とする神川は高原のほぼ中央部を南西に流れ出、町の南部・大字長字四日市付近において洗馬川と合流し、上田市街地南東部で千曲川に流入する。神川中流部沿岸・洗馬川沿岸、神川下流部左岸と段丘崖をもって接する本原扇状地面には谷平野が発達しており、一括して神川渓谷平野とも呼ばれ、上田盆地から放射状に伸びる谷平野のひとつとして数えられている。

また、この平野は神川が上田盆地に注ぐ際、標高672.9mの虚空藏山を西限にして狭隘部をなし、上田盆地との境界を明瞭なものとする特徴的な地形を呈している。

真田町は長・傍陽・本原の三つの地区から成る。長地区は町の東部・神川上流域に位置し、北東部にある四阿山麓の菅平高原を含んでいる。神川渓谷の狭い谷平野とその支流が開削した扇状地に四日市横尾・戸沢・石舟・つくい・十林寺・真田・横沢・角間・大日向の各集落が、また菅平高原には菅半の集落が存在する。現在では、南部の蓮台にある町役場を中心に半径5kmの半円内に耕地と居住地が集中している。

傍陽地区は町の西部に位置する。傍陽川・洗馬川沿岸の狭い谷平野とその支流が開削した扇状地に、傍陽川に沿って大庭・中組・岡保・入軽井沢の各集落が、洗馬川に沿って曲尾・萩・田中・横道・大良・穴沢・三島平・大倉の各集落が散在し、傍陽川・洗馬川の谷口集落として発達した萩が当地区の中心地となっている。

町の南東部に位置する本原地区は、西部に流れる神川と、烏帽子岳(2065.6m)山麓より西流している大沢川が形成する広大な扇状地に、下原・大畠・中原・表木・町原・竹室・荒井・上原・下郷沢・小玉上郷沢・下塚・赤井の各集落が散在する。東部の湯ノ丸山系は無住地である。

本遺跡(北緯36°25'42"・東経138°19'14")は本原地区の谷平野に面した狭隘なテラス状の台地に占地し、周囲の山岳や平野部一帯に遠望のきく好位置にある。また居館跡の北側を流れる大沢川は天然の堀をなしている。

真田町の扇状地を取り囲む山々の尾根山には、大字長・十林寺に位置する真田氏本城跡を始めとする真田氏城跡群が周辺諸国に対する防御を固めている。これらの立地条件より、館は最も地域行政、軍事等に適した位置に占地しているものと考えられる。(加藤憲子)

第2節 歴史的環境

真田町は真田氏発祥の地として名高い。その一方古来より群馬あるいは松代地方などに通じる交通路を提供してきた、この地の歴史的役割は多大であろう。

平野部での生活は繩文時代より営まれてきた。その遺跡の分布は平野全域にわたり、広範かつ活発な文化圏であったことが窺える。しかしその後の弥生時代の所産については、未だ確認されていない。おそらく小規模かつ散発的なものであり、経営基盤も水稻耕作以外のものであったと思われる。

続く古墳時代は、後期になって再び盛行するようになる。平野全域にわたり小円墳が分布する事実は、該期に至って集落数の増化、集落規模の拡大などの動きと同調するのであろう。その背景には耕作地の拡大を意図したものが大きいと思われる。

その後奈良時代以降の真田氏が出現するまでの様相もまた不透明である。

真田氏は真田の里から起った小土豪である。いつの時代かに東信濃の名族海野氏と関係ができ、滋野一統となった。「真田姓」がいつの時代に発生したかについては、様々な説がある。真田氏系図では弾正忠幸隆が真田郷に住み郷名を姓とした、と漠然と記載しているが、これは幸隆の年齢からみて、おそらく天文乍間をいうのであろう。しかし諸記録から考察して遠く鎌倉時代まで遡って考えることができる。

『殘羽本信州滋野三家系図』によると、海野幸氏の第4子幸春を祖とし、また『群書類從』は海野長氏の第7子七郎幸春が祖であって、小県郡真田郷に住んで真田氏を称したとしている。幸氏は『吾妻鏡』によれば源頼朝に仕えて、騎射の名人として武名があった人であるが、この時代が海野氏の全盛時代で、一族は東信地方を中心に中信地方から上野国まで分布し、繁栄を誇っていた。幸春は七郎幸春と称したとあるので、おそらく幸氏か長氏の七男で、小県郡真田郷に分れ住んだのであろうと考えられる。滋野、海野系図の中で真田の名称が現れるのはこの幸春がはじめてである。しかし幸春以下の数代は、皆平山麓の山狭の山家郷の小土豪として顕伏していたが、ようやく応永7年(1400)篠ノ井付近の横田河原で、信濃守護職の大笠原長秀の軍と、北信の土豪たちの連合軍の間で戦われた「大塔合戦」に織田清光の幕下に「実田」の名で現れ、更に永享結城合戦(1429)の陣番帳に村上頼清麾下として真田源太、源五、源六が参戦している。真田氏がこのようにして山奥にひそんでいた時代は更に約110年も続くが、天文10年(1541)に至ってようやく真田源太左衛門幸隆の名が戦史の上に浮かんでくる。

真田弾正忠幸隆は真田右馬允頼昌と海野信濃入道棟綱の女との間の次男で、永正10年(1513)に松尾城で生れたとするのが定説である。その頃の真田氏は海野氏の麾下に属した昔平山麓の角間川峡谷の小さな土豪であった。海野氏が没落したのは天文10年であるが、この事は『諏訪神使御頭日記』によれば、諏訪頼重、武田信虎、村上義清の連合軍が、海野、織田、真田、矢

沢等の海野一族を小県海野平に撃破した、とある。この戦で棟綱は幸隆と共に鳥居鉾を越えて、上州吾妻郡羽尾の羽尾道兼入道幸全の許へ逃げた。羽尾氏は海野一族であり、「羽尾記」によれば幸全は幸隆の妻の父であったとされている。そして棟綱は更に上杉憲政を頼ったが、それ以後の消息は全く分かっていない。幸隆もまた上州箕輪城の長野信濃守業政に身を寄せている。棟綱の嫡男幸善(あるいは幸義)は討死している。

一方、武田信虎は21歳の嫡子晴信によって遠州今川へ追放されている。家を継いだ晴信は民政に外征にめざましい活躍をはじめた。幸隆がこの晴信に臣従するようになったのは「真武内伝」には天文13年とあるが異説も多い。

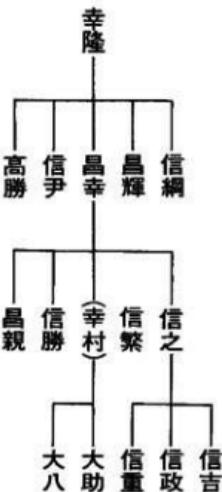
幸隆は様々な策略により武田の領地を増やし、忠信を尽くしたので、天文19年7月、晴信はその功績をたたえて、上田付近の所領を約束した。そして「高日京記」によれば、幸隆は天文20年戸石城を攻め落とし、旧領を回復した。その後の戦いにも幸隆は武田の将として出陣し、ついに天正2年5月に病死する。その後長子信綱が家督を継ぐ。

真田源太左衛門信綱は天文6年(1537)松尾城で生まれた。父は弾正忠幸、母は河原丹波守隆正の妹で、その長男とされている。父に従って武田氏に仕えて200騎の将となり、弟昌輝と共に「武田二十四将」のひとりに掲げられている。信綱は父に従って各地を転戦するが、永禄4年(1561)の川中島合戦には父に代って参加し、いわゆる「啄木の戦法」隊に加わって妻女山の背後より上杉謙信の陣に迫ったことが記録されている。ま

た永禄12年の北条氏政との伊豆茎山の戦、元亀3年(1572)の徳川家康を遠州三方ヶ原で破った戦などめざましい豪將ぶりを見せており、天正3年(1575)5月の三州長篠の合戦で討死した。「甲伝」によると、真田氏館跡は天正年間の構築で、幸隆の長子源太左衛門信綱の居館跡である、とある。

その後幸隆の三子である信綱の弟である昌幸が家督を継ぐ。

真田安房守昌幸は天文16年(1547)に生れた。父は弾正忠幸であるが、母については河原丹波守隆正の妹とあったり、某氏とあつたりしている。昌幸は少年時代に武田氏の一族の武藤左衛門尉信光の名跡を継いで武藤喜兵衛と名乗った。「甲斐国志」に「武藤は信玄の母方なり。昌幸信玄の奥近習六人の一、識量人に超ゆ」とあり、信玄の側近の一人として重用された。「真武内伝」には「足軽大将なり」



第1図 真田氏略系図

とあるが、永禄4年(1561)の川中島合戦には若年で初陣しており、それ以来多くの戦場を駆駆して戦功を立てた。

ところが天正3年(1575)の長篠の役で兄の信綱、昌輝が討死したので生家に戻り真田氏を名乗った。昌幸は家を継いだ後、父と兄の任務を継承し沼田城の攻略に努めた。昌幸はまず沼田城と利根川をへだてた地にある名胡桃城を改修し、ここに入って沼田城を攻めた。名胡桃城は昌幸がこのときはじめて築いたものだという説もある。

天正8年(1580)4月には沼田城の金子美濃守、渡辺左近允らが名胡桃城にいる昌幸に降伏してきた。5月に入ると城将藤田能登守信吉が降伏し、沼田城はついに開城した。昌幸が城を請け取るため乗りこんだときの様子を『加沢記』は伝えている。また、昌幸は武田の当主の出すべき体裁の文書も発行しており事実上独立大名の実を備えつつあったことがわかる。

天正9年正月から、武田勝頼は甲府の西北約21キロの韭崎に新たに居城を築きはじめた。昌幸はこの普請の奉行人の一人となり、甲斐へ赴いて諸事の指図をした。武田の衰運にかかわらず、昌幸の沼田領支配は着実に進んだのである。

天正10年(1582)3月に武田氏が滅亡し、昌幸は北条氏に仕える。そしてその後9月には台頭してきた徳川家康に仕えることになる。これは早くから家康に仕えていた昌幸の弟隱岐守信井の説得によるものである。

『加沢記』によると、昌幸は戸石城を本拠とし、部下を勧まして北条軍と対抗した。西上野の真田方の諸城は次々に北条氏に攻めとられ、北条の大半は沼田に迫ったが、城将欠沢頼綱らはよく戦って北条氏を撃退した。

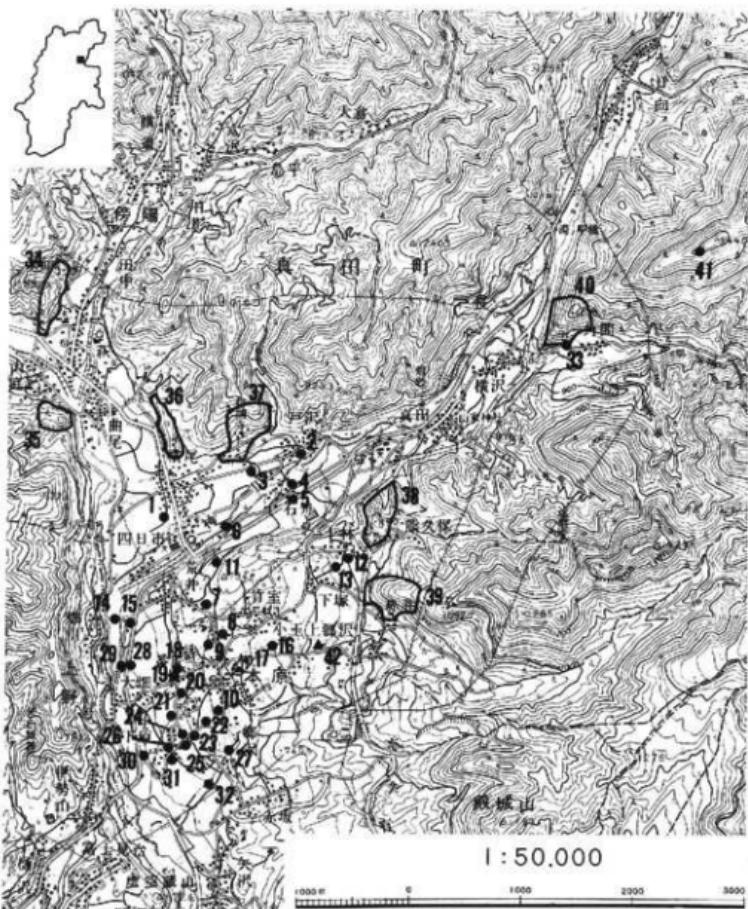
昌幸は戸石城にあって、さかんに北信濃の諸氏に働きかけた。上杉方は埴科、小県両郡の境の虚空蔵山に城を築いて、属代兄弟らを籠らせ、昌幸を圧迫した。これに対し昌幸は千曲川のほとりに上田城を築いて、ここに移った。この城は尼ヶ瀬(小泉郷)城ともいう。この地はもと地侍小泉氏の城であったが、天文22年(1553)幸隆によって破壊され、この頃は廃城となっていた。真田の松尾城や、それまでの戸石城に比べ、はるかに交通便利の地である。中山からこの平城へ進出したのは、真田氏が中世土豪的性格を一掃して、近世大名として新しい歩みを踏み出した第一歩であるといえるだろう。

(黒石亜矢子)

第3節 周辺の遺跡

真田町は地理的に大きく菅平高原と平野部とに二分することができる。

菅平高原には約100箇所を上回る遺跡が一様に分布し、その多くは高原の中心をなす平坦面の湿原地帯周辺、沢すじの洞穴、岩陰、あるいは湧水地点等に知られる。特に菅平A遺跡に代表される縄文時代早期の遺跡が比較的多いのが特徴的である。弥生時代から古墳時代にかけて



第2図 周辺の遺跡 1.四日市遺跡 2.柳又遺跡 3.松葉田遺跡 4.石舟遺跡 5.雁石遺跡 6.山造家遺跡 7.山崎遺跡 8.竹室遺跡 9.表木遺跡 10.南町上遺跡 11.荒井古墳 12.の山遺跡 13.下塙1,2号墳 14.北白麻遺跡 15.南荒井遺跡 16.殿藏院古墳 17.広山寺1,2号墳 18.北番匠古墳 19.北番匠B遺跡 20.北番匠A遺跡 21.町下1,2号墳 22.鶴の子田古墳 23.矢倉城古墳 24.大久館1,2号墳 25.西出早1,2号墳 26.村中古墳 27.桜林1,2号墳 28.藤沢遺跡 29.藤沢古墳 30.羽毛田古墳 31.小沼長者古墳 32.境田遺跡 33.日向畠遺跡 34.洗馬城跡 35.根古屋城跡 36.横尾城跡 37.内小屋城跡 38.真田氏本城 39.天白城跡 40.松尾城跡 41.遠見番所跡 42.居館跡

遺跡は極端に減少する傾向にあるが、標高1,400mの裾野末端に位置する陣の岩岩陰遺跡では弥生時代に比定される資料が圧倒的に多く検出されている。そのうち貴重な資料として「銅鏡」が検出されている。

続く奈良・平安時代のものとして山本畠遺跡を挙げることができよう。山本畠遺跡は8世紀から11世紀にかけての遺跡で、土師器、須恵器、灰釉壺形陶器等が検出されている。

一方平野部では旧石器時代の資料は全域で確認されている。なかでも神川右岸の河岸段丘線上に位置する四日市遺跡は、弥生時代を除き、縄文時代早期から、古墳時代後半、平安時代の遺構がそれぞれ重複して検出された重要な遺跡である。縄文時代では中期後半を中心に、住居跡25軒と夥い数の土坑が検出されている。古墳時代後期のものとしては住居跡1軒が検出されているのみである。古墳時代の遺跡としては他に近接する大畠地区の北番町B遺跡が有名であり、そこからは良好な一括資料が検出されている。奈良・平安時代の遺跡は平野部においてこれまでわずかに四日市遺跡で平安時代の遺構、遺物が検出されたにすぎなかった。ただ今回新たに大字本原字殿藏院より平安時代の土師器、須恵器が採集され、新資料が加えられた。

中世以降になって真田氏に係る遺跡が出現しはじめる。日向畠遺跡は、それに連なる遺跡として最古のものとして位置付けられている。日向畠遺跡は松尾山常福院の庵守址であり、真田氏の菩提所といわれる地籍に所在する。1971年に調査が実施されており、遺構として墳墓址が多数検出された。それらは五輪塔および宝篋印塔を壇塔としたものでそのうち23箇所から火葬された人骨が発見されている。また墳墓址へ向かってのびる参道と推定される配石遺構と、墳墓背後に石垣遺構も確認されている。被葬者も遺跡の地籍や仏塔の年代から想定されており、真田幸隆以前、南北朝の動乱以後の真田一族が葬られたと考えられている。

また、真田氏城跡群は、本城を中心にして、洗馬城、根小屋城、横尾城、内小屋城、松尾城、本城、天門城、矢沢城、戸石・米山城と、本原扇状地をとり囲むように築かれている。真田氏は頭初傍陽にある実相院に拠を構えていたが、現在も堀の内の地名が残る傍陽小学校の辺りを本拠とし、さらに横尾東方の内小屋城に移ったという意見もある。内小屋城は内小屋という地名が残る當時の居住地域と東側の古城と呼ばれる長い尾根上に築かれた非常時の戦闘用の地域とから成るとみられる。内小屋の地形は平地で、一方、古城の尾根の南方の急傾斜のところはいくつも階段状に曲輪が設けられている。内小屋城の西には横尾城が築かれている。横尾城は中世の山城で現在もほぼ完全に残っており、尾根末端に鎮座する秋葉神社の東側に本郭が位置し、曲輪北側には深さ3mの堀切がある。一方南側には曲輪が段状に設けられている。傍陽川による扇状地をはさんだ大字傍陽字若宮の北側一帯の尾根上には根小屋城がある。東太郎山から東北に延出する尾根先端に構築され、本郭は高城と呼ばれ平均部は20m四方の規模をもち、北側の低土居内は11m四方の方形をなす。扇状地面からの比高差約100mという比較的低い山

城であるが、尾根上を巧妙に利用して曲輪が密に設けられている。洗馬城はかつて城の山、または古城と呼ばれ、大庭の小字宮前と萩の小字表との境、傍陽小学校の裏山にある。本郭は東西9m、南北39mの長方形を呈し、西側と北側に土塁が認められる。またこの背後には、深さ13m、幅30mの堀切が尾根を遮断して設けられ、防備をより強固なものとしている。一方、角間と横沢の間にある松尾城は規模は小さいが洗馬を除き小県がほとんど見通すことができる位置に占地しており、上田から齊平や、鹿沢町へ向ける道をおさえる重要な役割をもっていたものと考えられる。本郭は東西11m、南北14mの規模で、四隅を石垣で囲んでいる。松尾城の東には山の尾根が急になる「遠見番所跡」と称される所があり、ここからは上田方面まで遠望できる。さらに同じ尾根上で、より高所に位置するゴトキミ山には石積みがあり、これらからは遠望が可能で、物見を兼ねた狼煙台と考えられる。また大字長・十林寺にある真田氏本城跡は、構築年代が鎌倉後期に遡ると考えられている。本郭は東西9m、南北37mで南側に高さ2mの土塁を築き、尾根を遮断している。本郭の北方には二の郭、三の郭が築かれ、本郭の西側に水の手と考えられる凹地が存在する。その周囲には、階段状の曲輪が多数構えられている。本城南方の尾根、真田氏居館跡の背後に天白城がある。本郭は東西27m、南北18mの広さで、本郭の東側は深さ3m、幅2.5mの堀切がある。本郭を北方に下ると6段の郭が確認できる。これらの山城のうち館跡に最も近く、堅固な立地を有する本城が所謂“詰の城”とみられ、城跡群の中で最も中心的な立場を有していたものと考えられる。

(水木和美)

第4節 遺跡の状況

館跡は東から西へと傾斜する、鳥帽子岳山麓の緩斜面上、標高約760mの位置に東辺80m、西辺130m、北辺150m、南辺160mの規模を以って築かれている。四方を囲む土塁は現地表面との比高差2~4mで、虎口周辺は他の場所よりも高く築かれている傾向にある。また、東、西、南面の土塁の外周には堀が巡っていたことが地盤図から推測できるが、現在では西、南面は道路となり、東面は埋土によって埋没している。北面においては、東から西へと幅約2mを以って流下する人沢川が天然の堀をなしている。

虎口は3ヶ所に開かれている。南面に開く虎口が大手(追手)、北面が搦手と考えられている。また、より小規模な虎口が東南角に築かれている。ここでは仮に木戸口とする。

大手は高さ約3mの土塁で、間口約20m、奥行約10mの所謂“両袖の虎口”的形態に築かれている。土塁は幅約4mにわたって開口しており、現在、鶴跡を縦断する幅約3mの道路が敷かれている。

搦手は、高さ約4mの北面土塁のほぼ中央部を幅約4mにわたり断ち切る様にして設けられている。柵形等の施設の存在は現在では判然としない状況にあった。

本戸口は、館跡の東北隅に“人隅”に築かれた高さ約2mの土壘を伴って存在する。幅約2mにわたって土壘が跡切れており、門が設置されていたことが想定できた。

また、南面の土壘にはもう一ヶ所土壘が断ち切れている部分があるが、これは最近開けられたものであることが判明した。（文献2）

館跡内部は、主に東側と西側の二段の曲輪によって構成されている。より上段に位置する東側の曲輪（主郭）には、中心部に皇太神社が鎮座し、周囲は鄭園等の花木の植わる公園として利用されてきている。

西側の曲輪（副郭）は、館跡を概断する道路の西側に存在する最大で比高差約4mの急斜面によって東側の曲輪と明確に区別されている。今まで、雜木林、桑畠等に利用されていた。以上の東、西二段の曲輪の表土上には、館が営まれていた時期にさかのばる遺構は露出していないかったが、所々に不規則に、二かかえ程もある巨石の転在が認められた。

西側の曲輪の北西隅には、厩跡と称される高さ約1.5～2mの土壘による約10m四方の区画が確認された。北面の土壘と厩跡の土壘との接点は鞍部となっており、出入口の存在が予測された。この区画も調査前までは雜木林や桑畠として利用されてきており、他の地区と同様に、遺物、遺構の存在は認められない状況であった。

（河合 慎）

第Ⅲ章 調査経過

第1次調査

(1) 調査方法

第1次調査は、平成2年12月16日から同21日までの6日間に亘って、館跡東南隅に位置する土壘開口部分を中心に行われた。調査方法としては、虎口と考えられる区域にAトレンチ5.6m×4.5m、Aトレンチの西側にBトレンチ3.7m×1.3mを、Aトレンチの北側にはCトレンチ16m×1mを、土壘の構築状況の観察のために設置し、館跡内側の土壘裾にDトレンチ2.8m×0.5m、Eトレンチ3.0m×0.5m、Fトレンチ2.8m×0.5mを、館跡外側の土壘裾にGトレンチ4.0m×0.8mを各々設置し、調査を開始した。

(2) 調査経過

12月16日、発掘機材の搬入を行い、遺跡の現状を写真撮影した後、トレンチを設定する。午後より各トレンチの掘り下げを開始する。翌17日、Aトレンチを完掘し、虎口に伴う石積部分の全貌が明らかになった。18日にはCトレンチを完掘し、土壘の構築状況が判明した。後、19日までに全てのトレンチを完掘し、平面図、セクション図の作成、写真撮影を漸時行った。20

日には全てのトレンチの埋め戻しを開始した。なおAトレンチには砂を充填し、遺構の保護を計った。21日には全てのトレンチの埋め戻しを完了し、調査の全てを終了した。

第2次調査

(1) 調査方法

第2次調査は平成3年4月22日から同年5月7日までの16日間に亘って行われた。調査方法としては、館敷地内の緩斜面(以降、曲輪地区と呼称)西面上墨に直交する様に、10m間隔で平行して1.5m幅のトレンチを16ヶ所、既跡と呼称される個所(以降、既地区と呼称)とその外縁部に幅1.5mで4ヶ所、西側の土墨を分断して設けられている水路状遺構とその周囲(以降、水路地区と呼称)に1m幅で3ヶ所、西側の土墨の外側(以降、西側地区と呼称)に0.5m幅で6ヶ所、館跡北側を東から西へと流下する大沢川沿いの烟地(以降、北側地区と呼称)に2.0m×2.0mのトレンチを3ヶ所、大手門跡、搦手門跡にそれぞれ1ヶ所の計31ヶ所にトレンチを設定した。なお、調査の進行状況と出土遺構等の関係により必要に応じて漸時トレンチの拡張を行った。また、トレンチには各々地区別にアルファベット順の名称を冠し、調査の便宜をはかった。

(2) 調査経過

4月22日、発掘機材を搬入し、調査地域の現状の写真撮影を行う。23日、トレンチを設定し、漸時掘り下げを開始する。北側地区 A～C トレンチを重機により掘削し、遺構等が存在しないことを確認する。24日、搦手門址より石組を検出。写真撮影及び実測を行う。25日、曲輪地区にF'トレンチを新設して、東側の曲輪の縁辺における上止め石積の確認を行う。同トレンチから土鍋片、鉢片等の出土を見る。26日、既地区 A トレンチにおいて銭貨、土鍋片、鉢片を、硬化面直上より検出する。27日、曲輪地区 G トレンチ東側を深掘りし、東側の曲輪の縁辺部が、版築を伴う盛り土によって構築されていることを確認した。また、F'トレンチを拡張、石積の範囲を明らかにした。28日、西面上墨に水路状の石組遺構が検出される。また、遺跡地形図の作成を行う。5月1日から4日までは、各トレンチの掘り下げと記録を行い、5日午前中までに全てを完了した。また6、7日には各トレンチの埋め戻しを行い、調査の全てを終了した。

第IV章 層序

一次調査の地域では、全般に搅乱をうけておらず、良好な堆積状況が確認された。また、木戸地区 A トレンチから検出された石組遺構の構築面より、館跡に伴う生活面はIV層上面に存在することが認められた。

二次調査の地域では、水道施設やアスファルト道路等の土木工事や、度重なる植林等の影響により、広域に擾乱をうけていることが判明した。しかしながら、東側の曲輪の西側縁辺部、つまり、曲輪地区F'トレンチ付近及び館跡で最も低地に位置する駿跡付近では比較的良好に堆積が観察された。その結果、駿地区Aトレンチで検出された硬化面や、曲輪地区F'-1トレンチでの遺物出土状況から、一次調査時に木戸地区Aトレンチで確認されたのと同じく、Ⅳ層上面に生活面が存在するものと認定することができた。

層序の様子は以下に示すとおりである。

第Ⅰ層 黒褐色土層(表土) 腐蝕土を主体となす粘性・しまりが共にない土層

第Ⅱ層 暗褐色土層 粘性・しまりが共に弱く、やや粗な粒子より成る。水分を余り含有しない土層

第Ⅲ層 黒褐色土層 粘性・しまりが共にやや強く、緻密な粒子より成る土層

第Ⅳ層 暗黄褐色土層 粘性・しまりが共にやや弱く、ローム粒を含む荒い粒子より成る土層

第Ⅴ層 ローム層(地山)

第V章 遺構

(1) 大手門(第6図)

南面土壘に両袖の虎口を伴って開口している。通路部分はアスファルト道路(幅3m)敷設、水道施設の設置等によってローム層にまで及ぶ擾乱を一面にうけており、遺構の存在は確認できない状況であった。

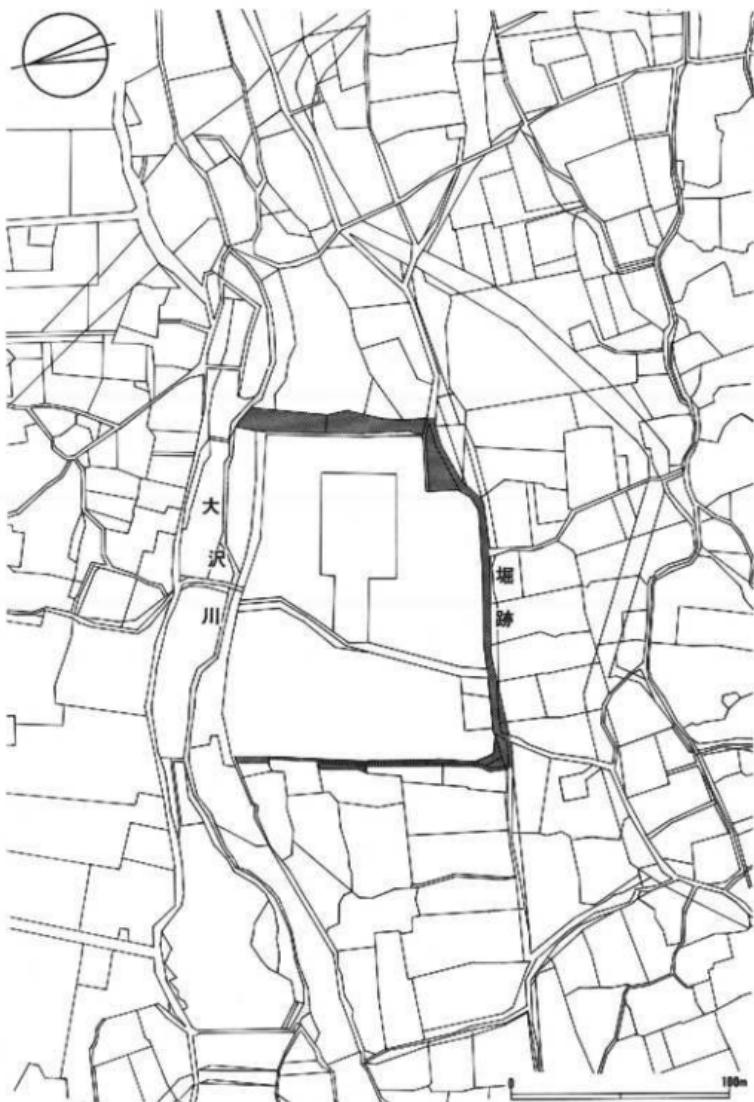
また、通路東側の土壘端部全体及び西側の土壘端部の北半部分にも擾乱が確認され、旧状を保っていないことが明らかになった。

一方、通路西側の土壘南半部分からは、土壘の裾を区画する石積が検出された。石積は長さ10~60cmの自然石で20~60cmの高さに、最高2段に構築されていたが、石の抜き取りや崩落等の影響により、遺存状態は余り良好ではなかった。

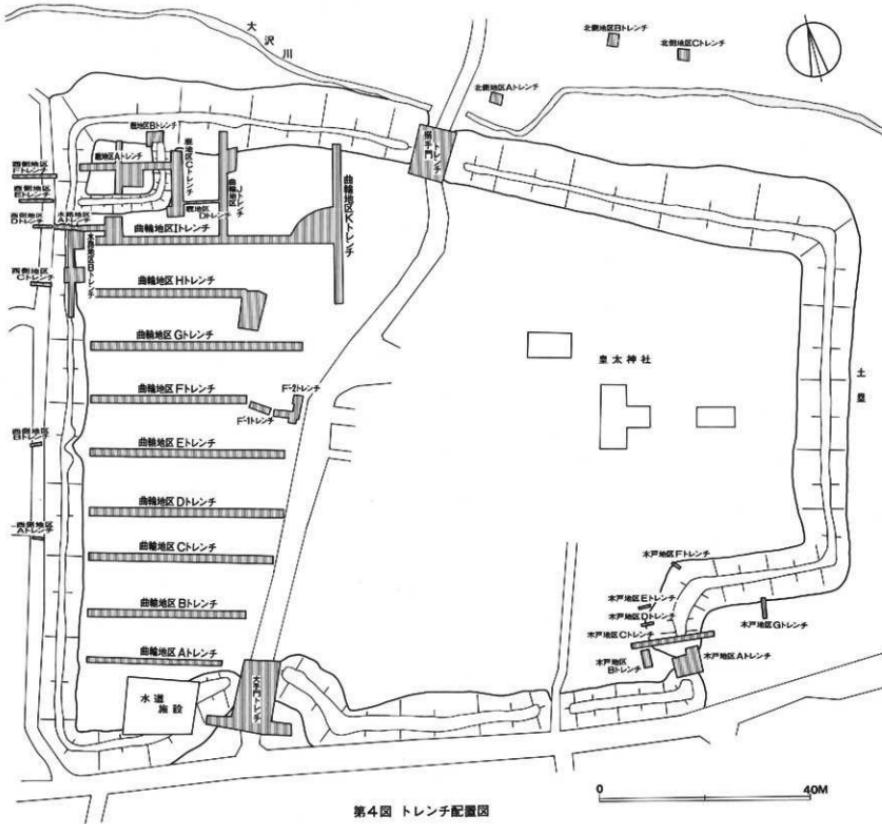
(2) 摺手門(第7図)

摺手門は北面土壘に幅約4mにわたり築かれている。通路部分は館を南北に貫く幅約3mの道路並びに水道施設の設置等によってローム層に及ぶ擾乱をうけており、全く遺構、遺物は検出されなかった。また、通路西側の土壘についても同様に、大幅な削平を受けている為、虎口に伴う遺構はみられなかった。

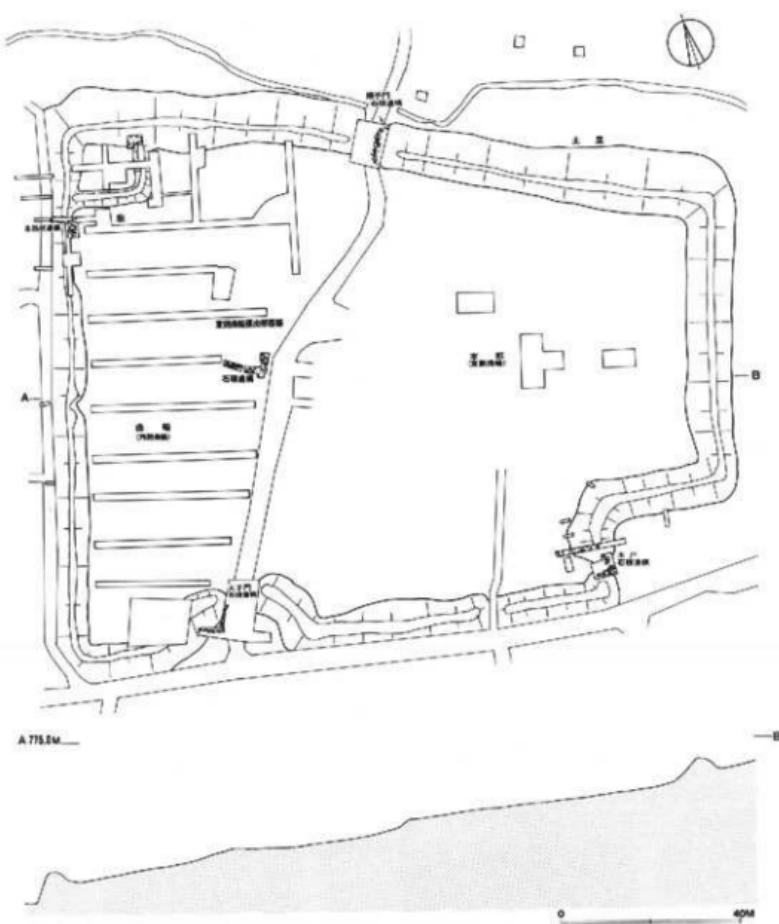
一方、通路東側の土壘端部からは、直径5~60cmの自然石による石積跡が検出された。石は土壘の中心線上に集中し、小塊が土壘端部をとり囲む様に配置されている。全体的に崩落しており、遺存状態は良好ではなかった。



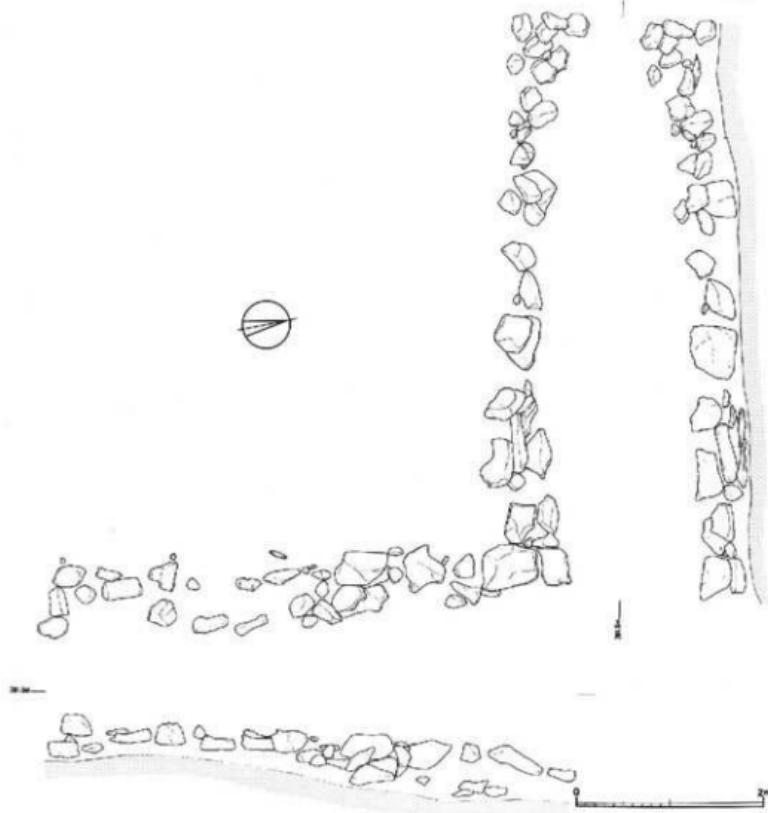
第3図 真田館跡周辺分筆図



第4図 トレンチ配置図



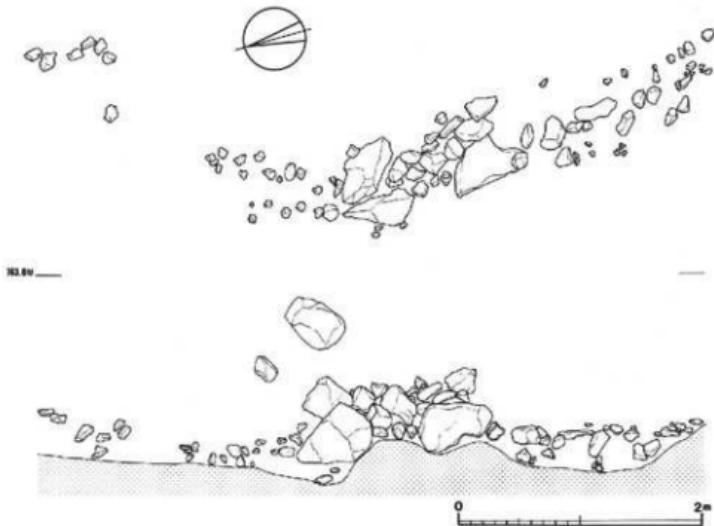
第5図 造構配置図



第6図 大手門石積構造

(3) 木戸口 (第8図)

調査以前より、土塁が断ち切れ鞍部となっていた。擾乱はみられなく、第Ⅲ層上面を構築面とする直径10~70cmを測る自然石から成る石積跡が通路方向へ両側から崩れでいる状態で検出された。比較的大きな石が石塁の主体を成し、小さな石は裏込めに使用されていたものと考えられる。また、構築面上に位置する石の配置からみると、虎口の通路幅は概ね1.8m程度になると推測される。



第7図 捏手門石積遺構

(4) 水路状石積遺構（第9図）

庭跡傍の西面の土塁を横断して検出された。約70cmの幅において長さ20~50cm、幅10~20cmの平面をもつ直方体様の自然石を3~4段に積み重ね、北面において高さ0.8m、長さ4.4m、南面において高さ0.5m、長さ4.2mの平行する石積が築かれている。それぞれの出口方向端部には、他よりもひとときわ大きい扁平な石を直立させ縁部を形づくっている。底面は、出口側半分に硬化面が、入口側半分に若干の石敷きがみられ、出口側にゆるやかに傾斜する排水時の水切れを考慮した構造になっている。

この遺構は館跡の最も標高が低く、降雨時等には水が集中してくると考えられる地域に築かれている。よって、水路であると考えられるが、硬化面の存在からも、通路として併用されていたことも推測される。

(5) 土塁（第10図、第13図）

土塁の構築状況は木戸地区及び窓地区において調査された。

木戸地区Cトレーニチでは、土塁中心線上に対応する地山を掘り凹めた中に自然石を配し地固めを行ったうえに、31層に及ぶ版築によって堅牢に築きあげられている。

一方、廐地区 A トレンチでは、廐を区画している土塁は生活面上に黒色土を盛り上げただけで築かれており、版築は施されていなかった。

以上の様相より、館を外周している土塁と廐を区画している土塁の構築状況には明らかな差異が認められる。これは、規模や立地、構築目的等の制約によって、作り分けが行われていたものと解釈できる。

(6) 堀 (第11図)

堀は木戸地区 G トレンチ、西側地区 A～E トレンチにおいて確認された。断面が浅いカマボコ状を呈する、幅1.5m～3.0m、深さ50cm程度の極めて小規模なものであり、溝的な要素が強くみられる。堆山であるローム層を掘り込んで構築されており、土塁頂上から掘底部までの比高差は2.5m～4.5mを測る。なお、出土遺物はみられなかった。

(7) 土止め石組遺構 (第12図)

曲輪地区 F'－1 トレンチにおいて検出された。高さ10～30cm、幅70cm～1m、長さ4mにわたり、拳大～人頭大の自然石で極めて不規則に雜然と積まれている。構築基盤は東側曲輪の盛土直上に位置し、東側と西側の曲輪相互の区画をするとともに、盛土の流出を防ぐ目的で築かれているものと考えられる。なお、F'－2 トレンチからは土鍋、鉢、カワラケ片が検出されている。

(8) 跪跡 (第13図、第14図)

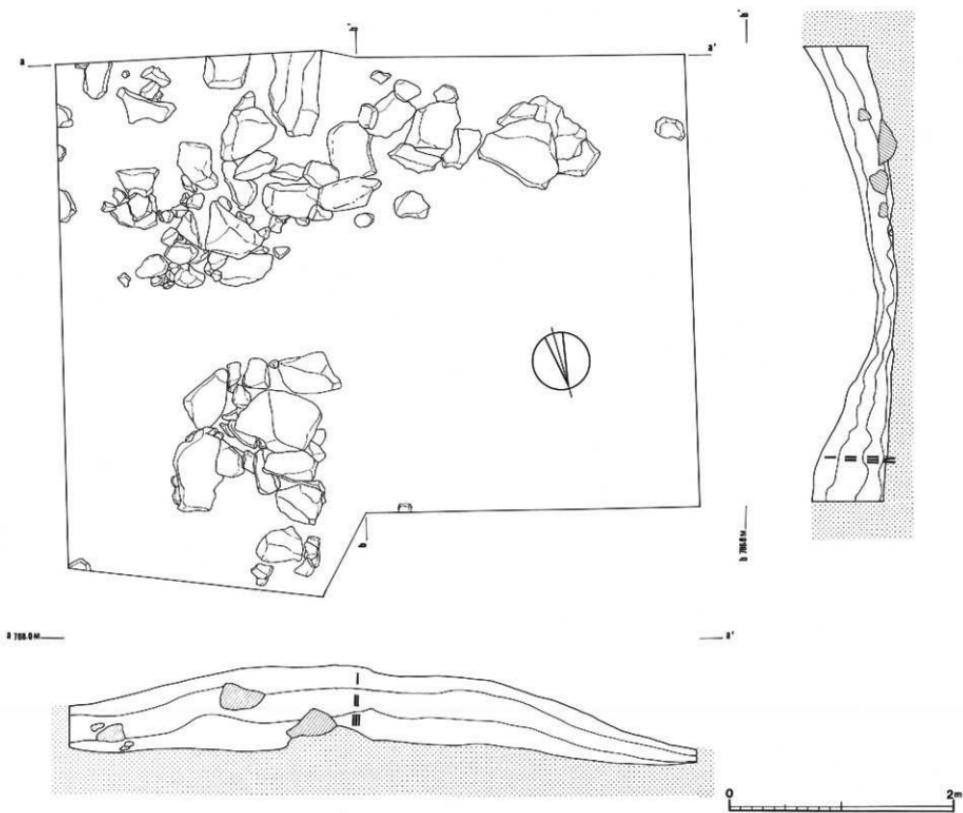
跪跡は土塁内部と外部とに A～D 4ヶ所のトレンチを設定して調査を行った。土塁内部の A トレンチからは、第IV層上面に硬化面が検出された。硬化面は拳大～人頭人の疊まじりの暗黄褐色土から成り、特に土を搬入して版築している様相はない。硬化面直上から土鍋、鉢等の土器片が出土していることからも、直接何らかの生活活動によって踏み固められたものと考えられる。

B トレンチは調査前に軽部が複数個が発見された跡跡及び北面の土塁と接する部分に設置された。当トレンチからも硬化面が検出され、土塁が約3mにわたり断ち切れていることが判明した。廐への出入口であると考えられるが自然石の散布がみられるのみで門の遺構は判然としない。C、D トレンチは廐跡の外周に設定された。土鍋、鉢等の土器片の検出面を以って遺構の検出に努めたが、拳大～人頭大の砾が一面に散布している状態であり、特に遺構は検出されなかった。

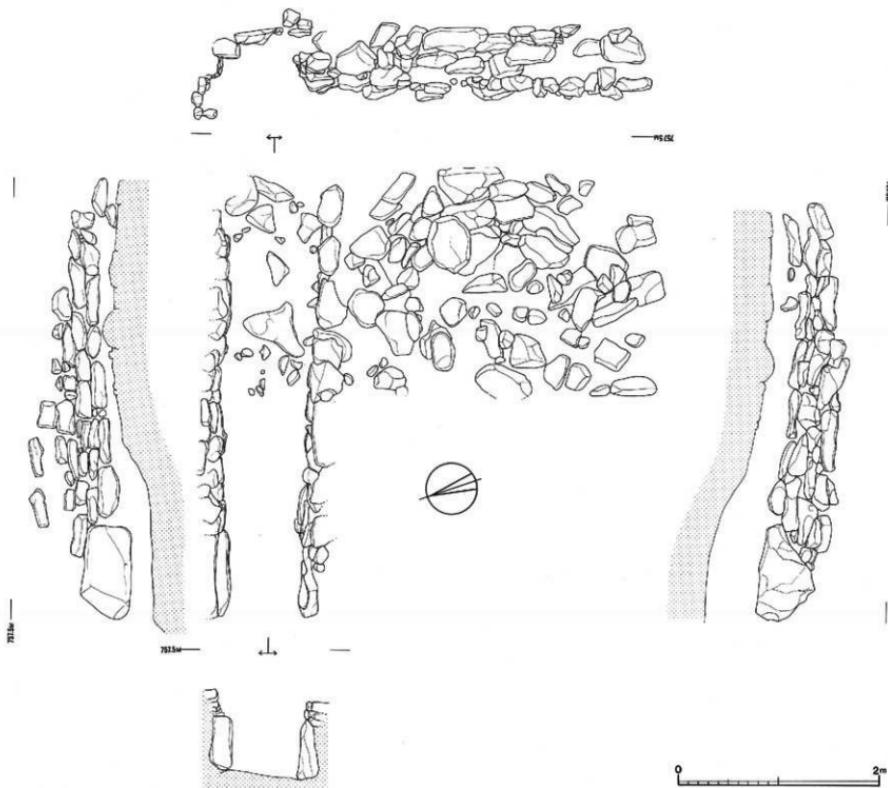
(9) 東側曲輪(主郭)西端における版築状況 (第15図)

版築の状況は、曲輪地区 G トレンチ東側において確認された。当該地区は東側の曲輪の西端に位置しており、西側の曲輪に対し舌状に突出した丘状の張り出しを呈している。調査の結果、第IV層上面から厚さ1mにわたって主に黒味を帯びた黄色土を以って、版築により固く積まれていることが判明した。この様相により、元来平坦であったところに人为的に張り出し部を構築し、相互の曲輪の境を明瞭にしていることが明らかになった。

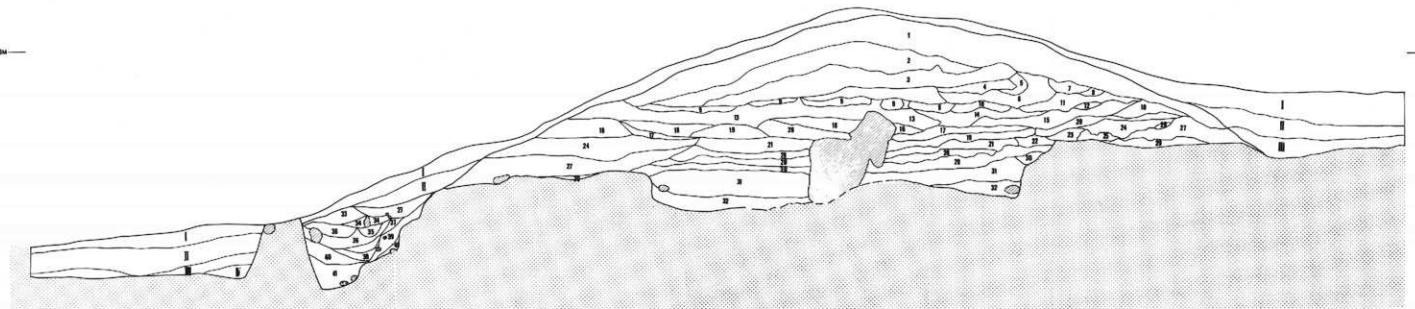
(河合 修)



第8図 木戸口石橋遺構

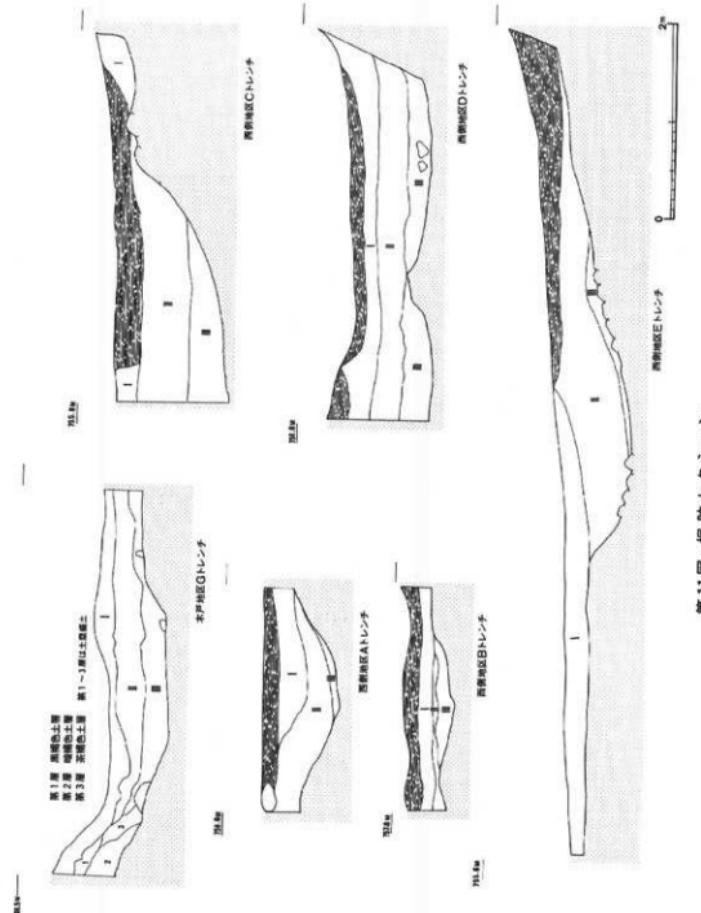


第9図 水路状造構

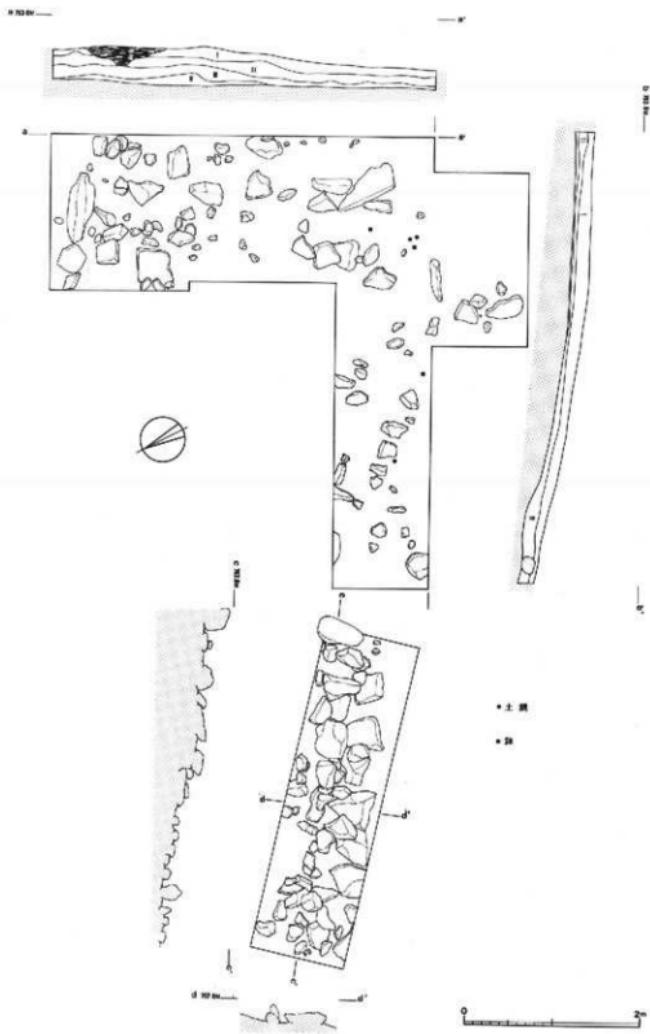


第1層 黑褐色土層	第6層 黑褐色土層	第11層 黑褐色土層	第16層 黑灰色土層	第21層 黑褐色土層	第26層 黑褐色土層	第31層 黑褐色土層	第36層 黑褐色土層
第2層 特褐色土層	第7層 黑褐色土層	第12層 黑褐色土層	第17層 黑褐色土層	第22層 黑褐色土層	第27層 黑褐色土層	第32層 黑褐色土層	第37層 黑褐色土層
第3層 黑褐色土層	第8層 黑褐色土層	第13層 黑褐色土層	第18層 黑褐色土層	第23層 黑褐色土層	第28層 黑褐色土層	第33層 黑褐色土層	第38層 黑褐色土層
第4層 黑褐色土層	第9層 黑褐色土層	第14層 黑褐色土層	第19層 黑褐色土層	第24層 黑褐色土層	第29層 黑褐色土層	第34層 黑褐色土層	第39層 黑褐色土層
第5層 細灰土層	第10層 黑褐色土層	第15層 黑褐色土層	第20層 黑褐色土層	第25層 黑褐色土層	第30層 黑褐色土層	第35層 黑褐色土層	第40層 黑褐色土層
第6層 明灰褐色土層	第11層 黑褐色土層	第16層 明黃灰褐色土層	第21層 黑褐色土層	第26層 黑褐色土層	第31層 黑褐色土層	第36層 明灰褐色土層	
第7層 黑褐色土層	第12層 黑褐色土層	第17層 黑褐色土層	第22層 黑褐色土層	第27層 黑褐色土層	第32層 黑褐色土層	第37層 明灰褐色土層	
	第13層 黑褐色土層	第18層 黑褐色土層	第23層 黑褐色土層	第28層 黑褐色土層	第33層 黑褐色土層	第38層 深色土層	
	第14層 黑褐色土層	第19層 黑褐色土層	第24層 黑褐色土層	第29層 黑褐色土層	第34層 黑褐色土層	第39層 黑褐色土層	
	第15層 黑褐色土層	第20層 黑褐色土層	第25層 黑褐色土層	第30層 黑褐色土層	第35層 黑褐色土層	第40層 明灰褐色土層	

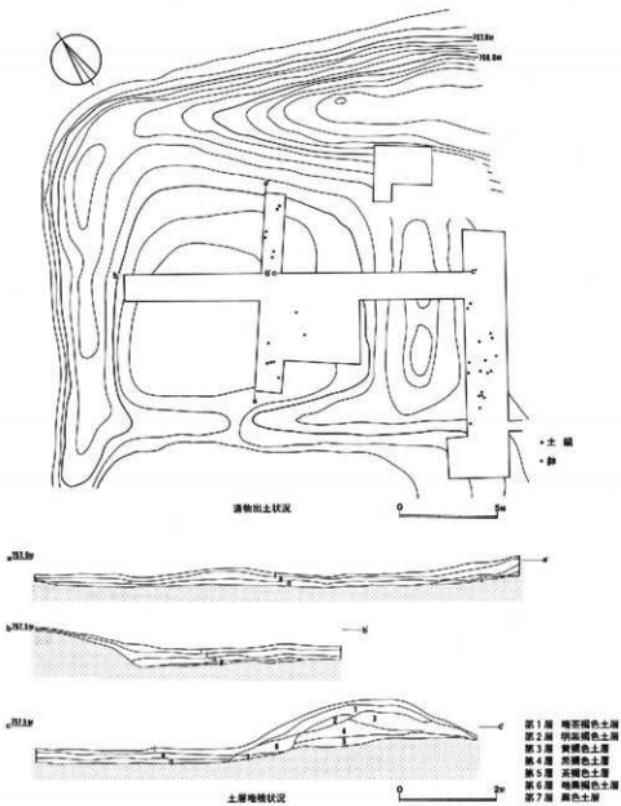
第10図 木戸地区Cトレンチ石積構造、土壌セクション



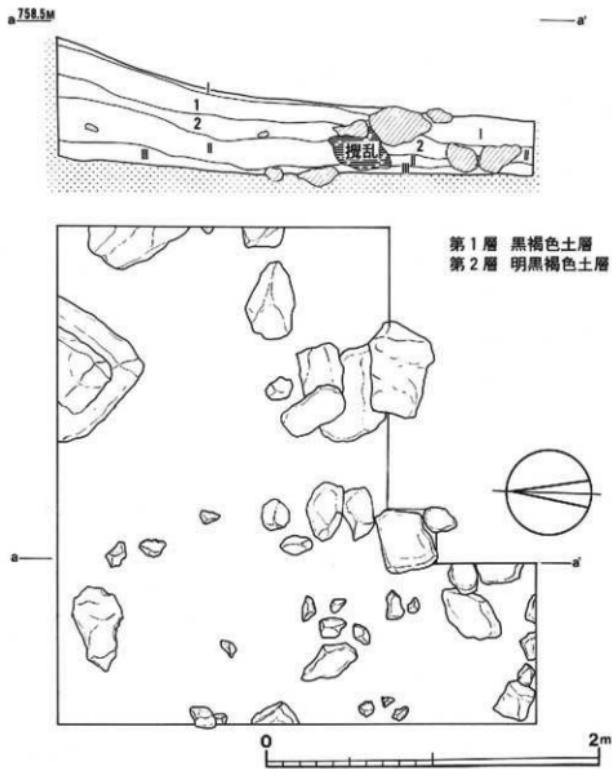
第11図 堀跡セクション



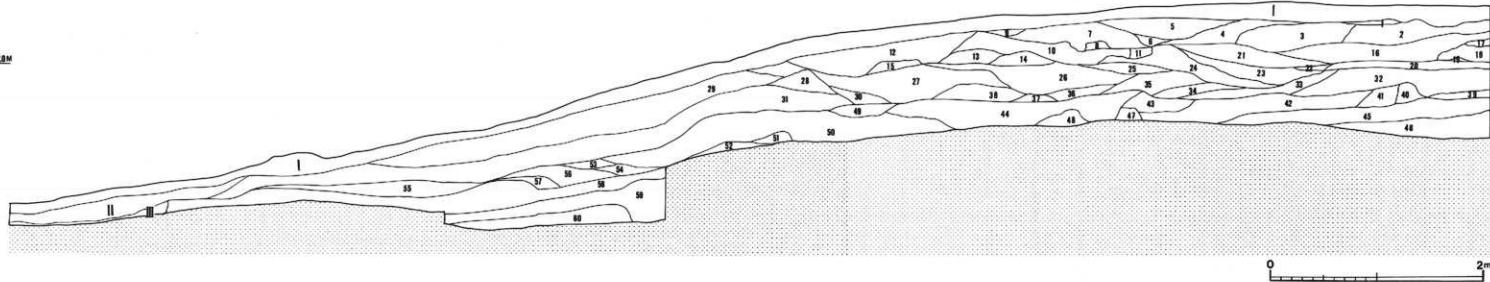
第12図 曲輪地区トレンチ石組造構



第13図 腹跡遺物出土状況及びセクション



第14図 底地区日トレンチ造構配置図



第1層 黄褐色土層	第16層 單黃褐色土層	第31層 黑褐色土層	第46層 黃褐色土層
第2層 黄色土層	第17層 黄褐色土層	第32層 黄褐色土層	第47層 黄色土層
第3層 黄色土層	第18層 棕色土層	第33層 單黃褐色土層	第48層 黄白色土層
第4層 黄白色土層	第19層 黄色土層	第34層 黄色土層	第49層 黄褐色土層
第5層 黄褐色土層	第20層 黄褐色土層	第35層 棕色土層	第50層 單黃褐色土層
第6層 黄褐色土層	第21層 明褐色土層	第36層 黄褐色土層	第51層 棕色土層
第7層 黄色土層	第22層 單黃褐色土層	第37層 明褐色土層	第52層 單黃褐色土層
第8層 單黃褐色土層	第23層 棕色土層	第38層 黑褐色土層	第53層 黄色土層
第9層 單黃褐色土層	第24層 黑褐色土層	第39層 單黑褐色土層	第54層 單褐色土層
第10層 明褐色土層	第25層 單黑褐色土層	第40層 黄色土層	第55層 單黃褐色土層
第11層 單黃褐色土層	第26層 棕色土層	第41層 棕色土層	第56層 明黄色土層
第12層 單褐色土層	第27層 黑褐色土層	第42層 單黃褐色土層	第57層 棕色土層
第13層 棕色土層	第28層 單褐色土層	第43層 明褐色土層	第58層 黄褐色土層
第14層 明褐色土層	第29層 棕色土層	第44層 單黑褐色土層	第59層 黄色土層
第15層 黄色土層	第30層 黄色土層	第45層 棕色土層	第60層 明黃褐色土層

第15図 曲輪地区Gトレーナ 東側断面状況

第VI章 遺 物

第1節 中世の遺物（第16図1, 2, 5~11）

本遺跡出土の中世の遺物は土鍋、鉢、カワラケである。総数33点が検出されたが、ほとんどが部分的な小破片に限られ、全体形を知り得るものはなかった。なお、カワラケは極めて小片の為、図示等が不可能であり、報告は割愛した。

(1) 土鍋（第16図5, 7, 9~11）

土鍋は12個体、20点が検出された。これらのうち実測可能なものは5点のみである。なお、全て表土層中の遺物であり、遺構に伴うものはみられなかった。

5は口径22.6cmを推定する口縁部片である。胴部上端に強いナデを施すことにより口縁部をなだらかに外傾させている。また、内外面をロクロナデした後、胴部外面に細かなケズリを施している。口唇部はヘラケズリにより、平坦に仕上げられている。外面には煤が一面に付着している。

7は底部直径10.8cmを推定する底部片である。底部外面には細かな砂圧痕が全面にみられる。底部内面はロクロナデにより調整された後、中心から外側へ広がる杉葉状の文様が陰刻されている。体部外面下端部にはロクロナデの後、底部方向から口縁部方向へ搔きげる様にヘラケズリが施されている。内外面ともに煤の付着が一面にみられる。

9は底部直径18.4cmを推定する底部片である。底部外面には細かな砂圧痕がみられ、被熱によって生じたとみられる表面の剥落が、部分的に観察される。体部外面下端部には横位のヘラケズリによる調整が施されている。外面には一様に煤が付着している。

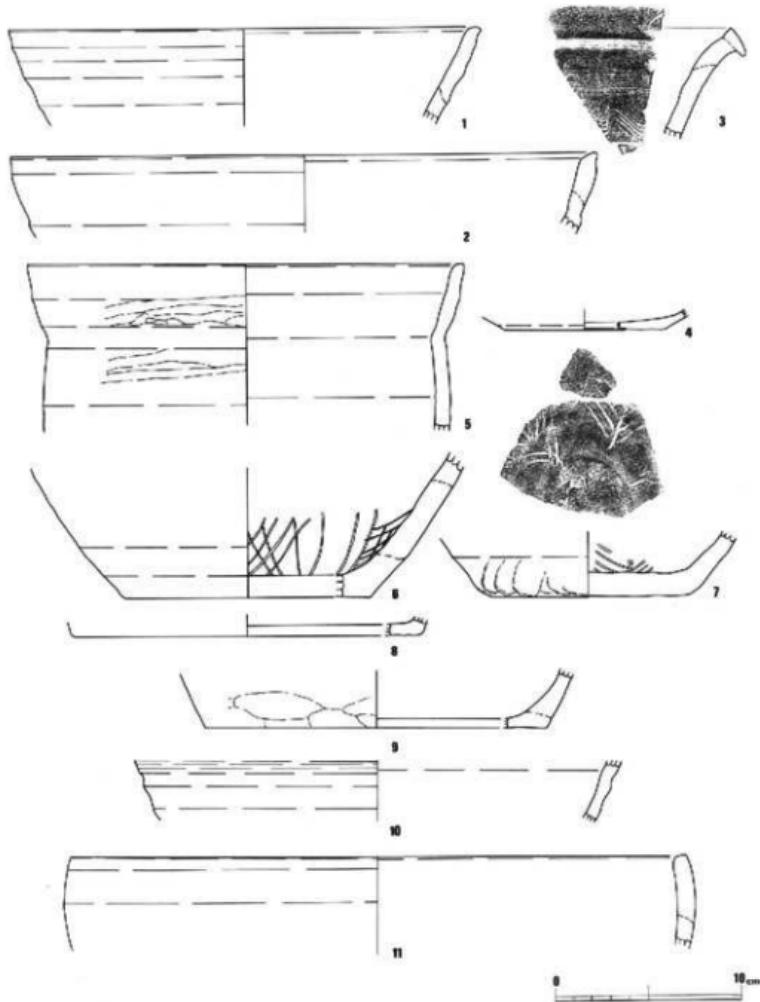
10は胴部片である。ロクロナデによって整形され、外面に陵をしばり出している。陵の頂上部分は一様にヘラにより磨かれている。また外面には一面に煤の付着がみられる。

11は口径33.4cmを推定する口縁部片である。全体をロクロナデで整えた後に、外面及び口唇部にヘラケズリを施し、平滑にしている。外面には一面に煤が付着する。

(2) 鉢（第16図1, 6, 8）

鉢は7個体分、13点が検出された。土鍋と同様、細かい破片が多く、図示できるものは4点のみである。1、3は表土から、2、4は戦地区Aトレンチで検出された硬化面の直上からそれぞれ出土している。

1は口径25.3cm、2は口径31.4cmを推定する口縁部片である。両者ともに全体をロクロナデによって調整した後、口唇部に上転ヘラミガキを施し平滑にしている。外面には明確な稜線を残している。



第16図 平安時代の中世の遺物

6は底部直径13.2cmを推定する体部から底部にかけての破片である。底部外面には、細かな砂圧痕がみられる。体部は内外面ともにロクロナデによって調整されており、内面には、格子目状の陰刻が施されている。

8は底部直径18.7cmを推定する底部片である。底部外面には砂圧痕を残し、内外面ともにロクロナデによって調えられている。わずかに遺存する体部外面下端部には、ケズリ等の痕跡は観察できない。

これらの上鍋、鉢は、遺跡の生活面と考えられる硬化面に伴うものが検出されていることから、館が営まれていた真田氏が根拠地を上田へ移す以前の時期である16世紀後半に該当する遺物であると考えられる。

(河合 修)

第2節 その他の遺物

(1) 繩文時代の遺物

縄文土器 (第17図～第21図)

真田氏館址遺跡出土の縄文土器は、小型コンテナ約1箱、時期的には縄文時代前期を主体となす土器群である。遺物は、南北に走る大沢川に面した傾斜面低地で検出された。特に鹿跡付近にまとまりを示しているが、出土層位はI～III層であり、館築造の際、版築等で縄文時代の遺物包含層が攪乱を受け、再堆積したことを探察させる。

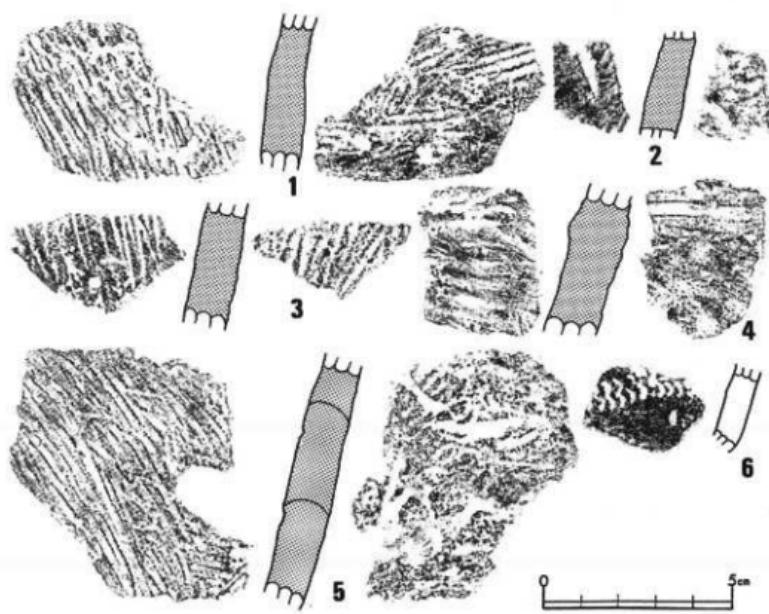
本遺跡から出土した前期前半の縄文土器は、系統に基づいた厳密な時期比定が難しく、今後の慎重な検討を必要としているものと言えよう。本遺跡の資料が、当該地域における編年研究に資するものとなれば幸いである。

縄文土器を検討するにあたっては、時間軸に沿った群別を行い、文様の特徴や施文手法等の属性から細分を加えていった。詳細は、以下に記載する。

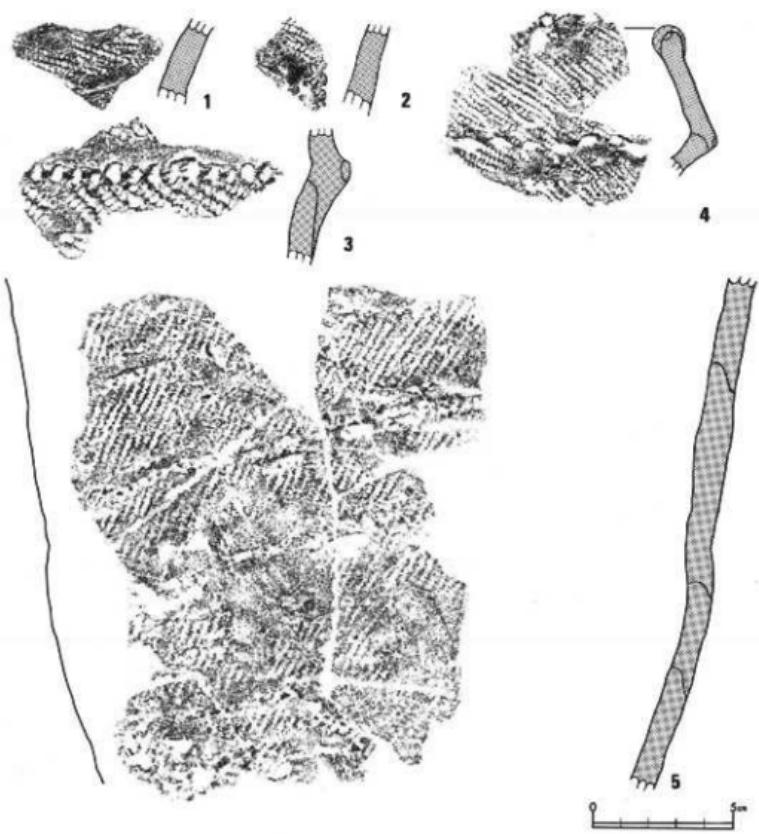
第1群土器 (第17図1～5)

早期末、条痕文系土器を本群とする。表裏に条痕のみが施される破片なので時期比定は難しい。胎土には、粗い繊維を多量に混入する。

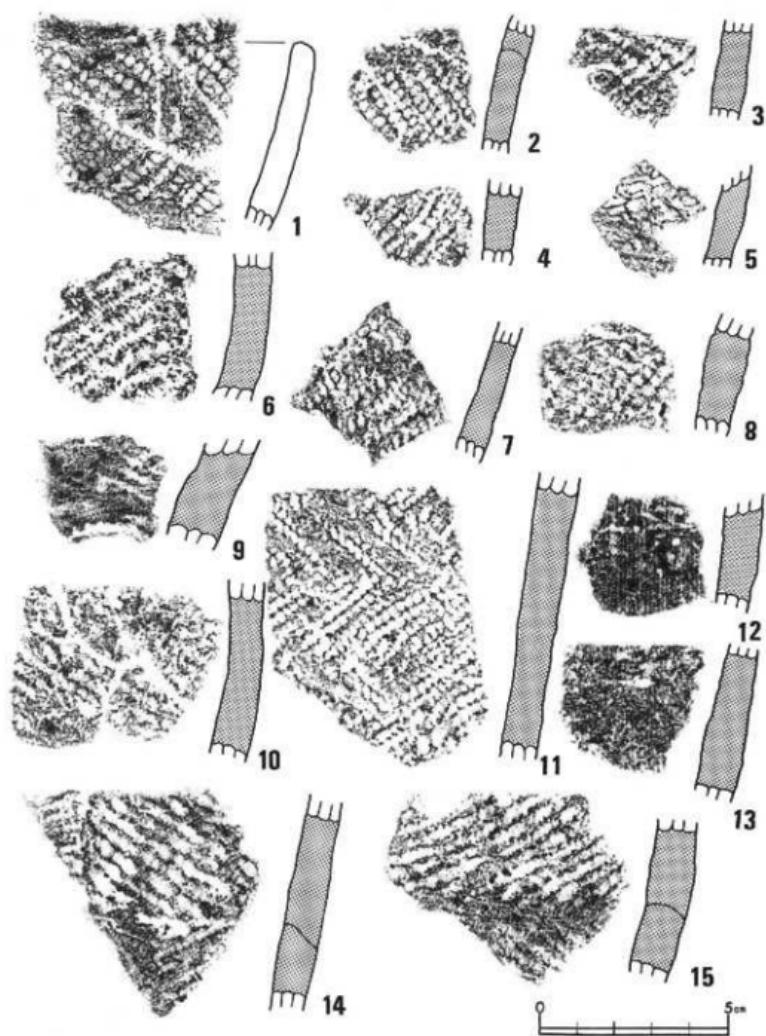
1・2・4・5は貝殻による条痕調整で、表裏ともに、斜位方向の条痕(1・2・5)の土器と、横位方向の条痕(4)がある。条痕の施し方、部位によっても違いがあるが、前者の表面は一方向に安定して長く押し引かれ、裏面は異方向の斜位条痕が短く施される傾向にある。後者は、表面の条痕はナデ調整されて不明瞭である。5の工具は、あるいは棒状のものかとも思われるが、押し付けられる貝殻の部位や角度、施文のタイミングなどを加味して同一に分類した。1・2・5の胎土には、白色粒子も多量に含まれる。また、粗い繊維の束状の調整痕が裏面に見られる。焼成は脆弱である。色調は茶褐色、赤褐色を呈す。4の胎土は比較的堅緻で、色



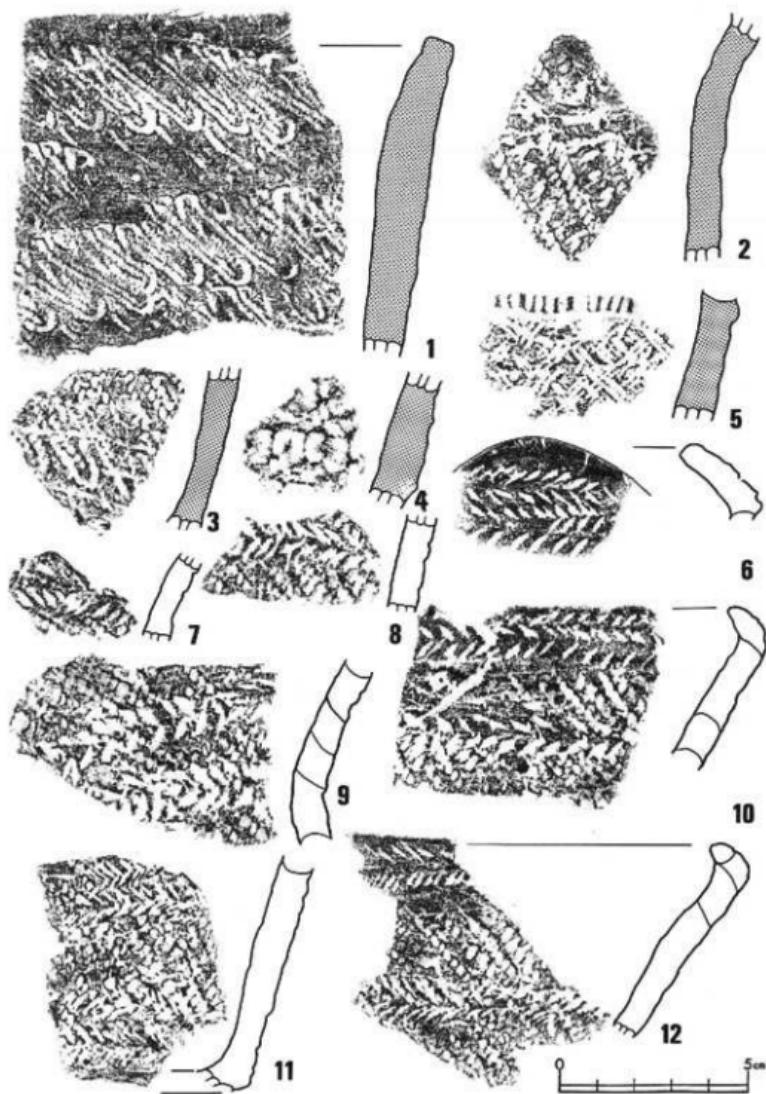
第17図 縄文土器(1)



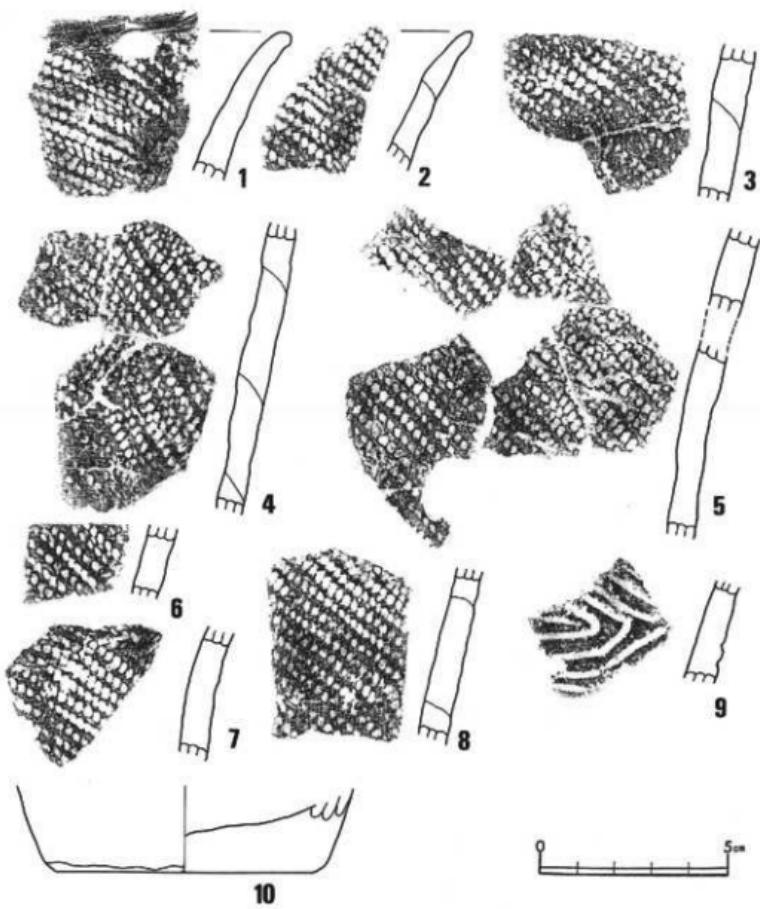
第18図 縄文土器(2)



第19図　縄文土器(3)



第20図 縄文土器(4)



第21図 縄文土器(5)

調は薄灰褐色である。3の表面は、櫛歯状工具による条痕で施文後に撫で付けられている。裏面は斜位方向の貝殻条痕である。色調は赤褐色を呈す。

第2群土器（第17図6、第18図1～5、第19図1～15、第20図1～5）

本群は前期前半の土器群を一括した。多寡はあるものも、胎土には纖維を含有する。文様の特徴から3類に分類した。

1類（第18図1～5）

前期初頭、花積下層式併行期と考えられる土器である。逆“く”の字形に内傾する小波状口縁部の口唇頂部と、逆“く”的字形頂部に巡る刺突が特徴である。胎土には粗い纖維を多量に含み、脆弱である。長門町六反田遺跡（児玉1983）に類例が見られる。

1～4は口縁部破片で、いずれも2段RLの繩を転がしている。1・2は比較的堅緻に感じる。3・4は繩文施文後に、左から右方向へ刺突が巡らされる。3の刺突は半截竹管で、4は先端が尖った棒状工具で施されている。5は2段LRの繩を散漫に施している。胎土には纖維のほかに、砂粒、小石粒を多量に含む。中でも多量の白色粒子と、少量の赤色粒子が目立っている。表面は、指頭痕で繩文が一部磨消されている。裏面には土器製作時の指頭による凹凸が明瞭に残されている。また、裏面には纖維板が著しい。

2類（第20図5）

前期前半、神ノ木式に比定される土器である。わずかに1点のみの出土である。棒状工具を押し付けた刻印をもつ粘土紐を横走させ、地文には格子目の第3種の附加条と思われる繩が施される。胎土には多量の纖維とわずかな砂粒、透明粒子を含む。裏面の調整は入念に行っている。断面中心は黒く、纖維が多量に混入されている。

3類（第19図1～15、第20図1～4）

繩文のみが施される土器を一括した。1・3・8・11・14・15は羽状構成をとる。1・3・8は段毎に2段RLとLRの繩を交互に変えて回転させている。1は纖維を含まず、堅緻な胎土である。3・8は纖維が多く、砂粒が少ない。11は第一種の附加条と2段LRの結束による羽状繩文である。纖維よりも砂粒が多く、裏面の調整は入念である。14・15は1段Rとしの繩による羽状繩文である。14は菱形構成をとる。14・15の胎土は砂粒が纖維よりも多く、器面は粗い。

2・9・10は2段RL、4・12は2段LR、5は3段LRL、6・7は0段多条の2段LRの繩がそれぞれ転がされている。2・7・10は纖維の混入が少なく、砂粒が多い。4・6・9・12は多量の纖維が混入され、裏面の調整が著しい。特に9は光沢を帯びていて、花積下層式に近似する。

第20図1は細い2段RLの繩2本を、閉じた端で交差に入れ子にして束ね、緩く寄り合わせた原体を横位方向に回転させている。3も同種の繩だが、原体の中央は纖維を巻付けて束ね

ている。これらは極めて特異な繩として注目される。1・3は、胎土に多量の纖維と少量の砂粒および白色・赤色粒子が含まれる。入念な器面調整の後、施文している。色調は黄褐色を呈す。2の破片下段は、格子目に現れる第3種の附加条である。原体末端を少し曲げてあるらしく、波状を描く。破片上段は1・3と同様の繩と思われる。少量の纖維と、多量の砂粒を含み、特に不透明粒子が多い。色調は、赤褐色を呈す。4は、多段ループが施文される。大量の纖維を含むのみで、軽く、脆弱な土器である。

4類 (第17図6)

前期前半と考えられる、異系統の上器である。6は、細い竹管2本による3字状刺突である。胎土には砂粒、黒色粒子を含み、堅板な土器である。色調は赤褐色を呈す。

第3群土器 (第20図6~12、第21図1~8)

前期後半、諸繩式に比定される土器を一括した。文様の特徴から2類に細分した。

1類 (第20図6~12)

諸繩b式に比定される土器である。6以外は、地文に2段RLの繩が施される。浮線文が消失し、矢羽根状の爪形のみが用いられるやや新しい段階と考えられる。胎土には細砂粒を均一に含み、焼成もよい。裏面調整は、泡状工具で横位方向に磨き込まれている。色調は薄黄褐色を呈している。

2類 (第21図1~8)

諸繩式に伴う粗製土器を本類とした。堅板な2段RLの繩を、ある程度乾かした器面に、軽く横位、あるいは右上がりの斜位に回転させている。裏面には土器製作時の指頭による凹凸を顕著に残し、横位調整痕も顕著である。1は口唇部裏面を横ナデして外反させている。胎土には細砂粒を含み、色調は光沢のある赤褐色である。

第4群土器 (第21図9・10)

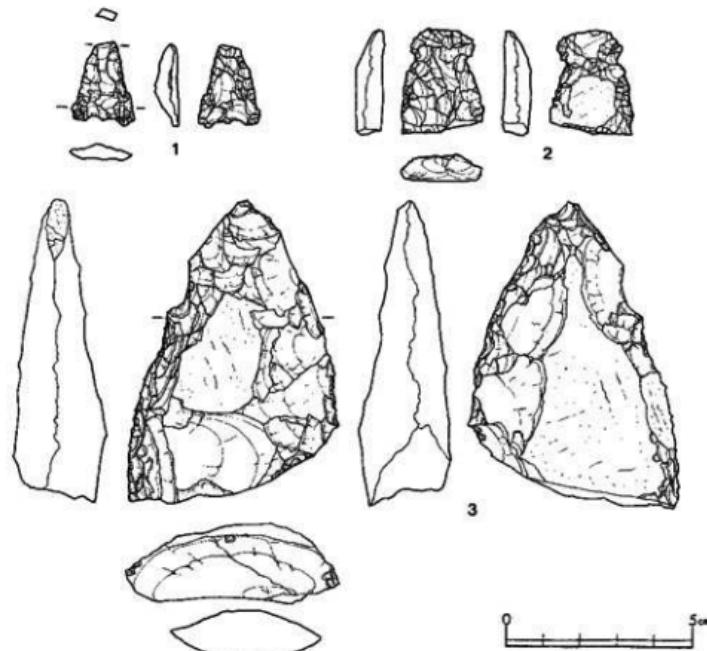
中期以降と思われる破片をまとめた。消極的な分類であって、今後の検討を要する。9は沈線X彫が施される。堅板な素地で、色調は黄褐色を呈す。10は底部である。砂粒、雲母、透明粒子等の混入物が多い。器面はザラザラして、脆い。色調は赤褐色。 (岸崎浩実)

石器 (第22図)

繩文時代の石器は3点の製品・未製品が検出された。全て表土からの出土遺物である。

1は石錐である。長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm、重量1.67gを計る。先端を欠く二等辺三角形様の形態を有する無茎凹基錐である。全体は粗な調整により形づくられ、両側縁と基部には荒い剥離が施されている。先端部や基部に十分な調整が行われていないことから、未製品と考えられる。材質は黒曜石である。

2は石匙である。残存長2.8cm、最大幅2.2cm、厚さ0.8cm、重量2.07gを計る。表面は向



第22図 縄文時代の石器

側縁からの基部から先端部方向へ順に剥離が施されている。裏面は側縁部により密な調整がみられるが、中央部に自然面を広く残している。また、先端部は折れにより欠損している。材質は黒曜石である。

3はラフ・ポイントもしくは石斧の未製品と考えられる。残存長8.2cm、最大幅5.7cm、厚さ2.5cm、重量94.17gを計る。両面に広く自然面を残し、側縁部には表面右側、左側、裏面右側、左側の順で交互剥離が施されている。製作途上で生じたとみられる欠損により下半が失われている。材質は頁岩である。

(河合 修)

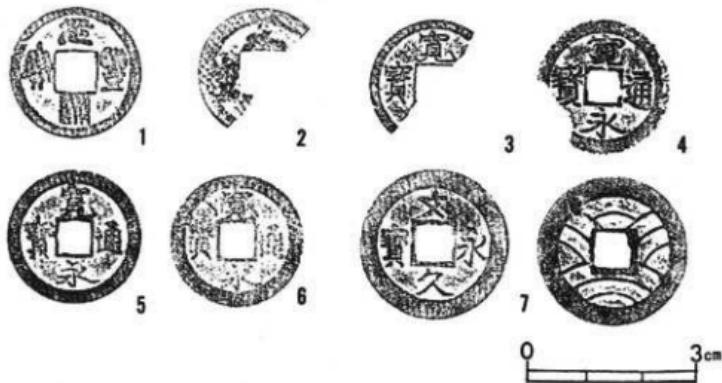
(2) 平安時代の遺物 (第16図 3, 4)

平安時代に該当する遺物は2点検出されている。2点ともに表土からの出土遺物である。

3は須恵器の壺の口縁部片である。輪積みによって整形した後、ロクロナデで調整を行っている。外面には波状文が施しており、一面に灰黒色の自然釉を被っている。

4は土師器の環で所謂内黒土器の底部片である。ロクロナデで調整した後、内面を丁寧に磨き上げて黒色処理を施している。黒色部分は使用による磨滅でにぶい黒色を呈している。外面底部は切離し後、ヘラケズリによって丁寧に仕上げられている。

これらの遺物の年代は、土師器環が大字長字四日市に所在する四日市遺跡出土遺物に類似することから、9世紀代に求められよう。須恵器甕は、時期は判然としないが、概ね、土師器環に伴う頃と考えてよかろう。



第23図 錢 貨

遺物番号	捕獲番号	出土位置	名 称	初 鑄 年 代	西 历	備 考
1	23-1	駿A表土	元豊通宝	北宋 元豊元年	1078	篆書、鑄錢の可能性あり
2	23-2	*	大□口宝	?	?	磨滅と欠けのため判読不能
3	23-3	*	寛延通宝	江戸 元文元年?	1731?	彌欠け鳥羽銭?
4	23-4	水路A表土	寛永通宝	江戸 寛永14年	1637	一部欠、古寛永高田銭
5	23-5	大手門表土	寛永通宝	江戸 元文元年	1731	新寛永 鳥羽銭
6	23-6	*	寛永通宝	*	*	*
7	23-7	*	文久永宝	江戸 文久3年	1863	

第1表 錢貨観察表

(3) 錢貨（第23図）

錢貨は7点検出された。うち5点は江戸時代のものであり、館の営まれていた時期に使用されていたと考えられるものは1.2の2点を数えるのみである。

（河合 勝）

第VII章　まとめ

今回の調査は館跡の史跡整備のために、主に遺構及び生活面の確認、造営年代の特定等の館のなりたちの解明に主眼をおいて実施した。その結果、以上に報告してきたとうりの成果を上げることができた。検出された遺構のなかには、水路状遺構など調査前には予測もできなかつたものもあり、現在まで不透明であった真田氏館跡の構造が断片的ではあるが明らかになったといえよう。

発掘調査によって得られた成果の第1には、遺構の遺存状態が余りおもわしくなく、ほとんどに擾乱が及んでいることが判明した点である。調査対象地域でも特に館跡西側の曲輪の部分は、先にも述べたとうり桑畠、雑木林等に幾度となく植林をくり返して利用され、また、何らかの用途により曲輪内に配置されていたとみられる巨石も、後世の移動を被り、元位置を保っていないことが判明した。この様な擾乱の影響で、今回検出された遺構の多くも旧状をとどめておらず、館に付属する建築物の様相をとらえ切れなかったことは極めて残念である。

成果の第2は、館に伴う時期の遺物が特に少なかった点である。日向畠遺跡でもみられる様に、館址周辺の中世の遺跡においても出土遺物は少なく、上器や陶磁器等によって当時の生活様相を窺い知るには未だ資料が十分でない。今回の調査では、鉢、土鍋、カワラケ等の上器及び銭貨の出土を見るに限られ、輸入陶磁器などの高級品は一切検出されなかった。これは、一乗谷朝倉館などの戦災によって廃滅した中世居館の出土遺物の様相とはかなり異なっている。また、焼土の堆積や石積みの石材に被熱の様子が一切みられなかったことから、館の廃絶は、真田家主従の上田への進出によって生じ、貴重なものは全て持出されたものと考えられる。一方で、遺物の少なさから館が営まれていた期間中には館外へ規則的にゴミの廃棄が行われ、決して館内に打ち捨てておくことはなかったであろうと推測される。

成果の第3は、館内の地形がかなり意図的に造り変えられていることが明らかになった点である。館は主郭と考えられる東側と副郭とみられる西側の2つの曲輪とに大別できるが、調査の結果、東側の曲輪が西側の曲輪へと舌状に張り出している地域は、自然地形でなく、明らかに版築を用いた基盤造りにより緩斜面上に平坦面を設け、館の諸施設を築こうとする目的を以って普請されている。この様な意図のみられない西側の曲輪に比較すると、自づから館の主要施設は、より強固な基盤をもつ東側の曲輪の、現在神社が鎮座している辺りを中心として設け

けられていたものと考え得る。

以上に今回の調査における成果の幾つかを紹介した。年代決定となる資料が少ない為に、館の構・改築年代が今ひとつ明らかに出来なかつたことは残念である。里伝によれば、構築年代は永禄年間(1558~1573年)、天正年間(1573~1592年)との諸説がある。またこれらに近接する年代で、新たに館を築く必要が生じる様な真田氏の大転機となる出来事としては、真田幸隆が天文20年(1551年)、戸石城攻めの功により、上州より旧領(丸出)へ10年ぶりに復帰し得たという史実がある。このことから、領地の再整備として館が築かれたと推測することも可能で、構築年代を最も古く見積れば、天文20年と考えることもできよう。廃絶年代については、真田昌幸による上田城への進出が天正11年(1582年)に行われており、館跡に所在する泉太神社は上田への移転の際、館が廢れるのを憂い勧請されたと伝えられていることから、天正11年以降館は神社の所有するところとなり、本末の機能は失われたものと推測できる。よって諸説の中でも、構築年を幸隆の真田への復帰後と考えても天文20年から天正11年の31年間、天正年間とすれば長くとも11年間営まれていたと考え得る。何れにしても、比較的短命にしてその用途を終えたものであることは確かであろう。

真田氏館跡については以上のようないくつかの成果が収められたが、同時期に存在したとみられる周囲の山城群や、「たつみち」など特異な小字名の問題、字中原一帯の塗敷剤の存在など、本文中で言及できなかった課題が多い。また、未だ不透明である中世土器の様相にも検討を加える労を忘れてはならない。総合的に真田の中世像を復元することは現在緒についたばかりであるが、本書が今後の研究の一助となることを願って、この報告を終ることとする。

(青木 豊・河合 修)

参考文献

1. 小縣郡役所『小縣郡史』1922
2. 藤沢直枝「真田氏の居城(松ノ尾城)及居館(真田御屋敷)」「長野県史蹟名勝天然記念物調査報告」第4輯 1925
3. 真田町教育委員会『真田町口向畠遺跡発掘報告書』 1973
4. 真田町教育委員会『山本畠遺跡緊急発掘調査報告』 1977
5. 田中誠一郎『真田一族と家臣団——その系譜をさぐる——』信濃路 1979
6. 真田町教育委員会『真田氏城跡群』 1982
7. 小林計一郎『真田一代軍記』 新人物往来社 1986
8. 真田町教育委員会『四日市遺跡』 1990
9. 竹内理三編『角川日本地名大辞典20 長野県』 角川書店 1990

PLATE



1. 遺跡遠景



2. 曲輪地区調査前景



1. 曲輪地区・概地区調査前景



2. 曲輪地区 トレンチ設定状況



1. 大手門調査前景



2. 大手門調査前景



1. 大手門石積遺構検土状況



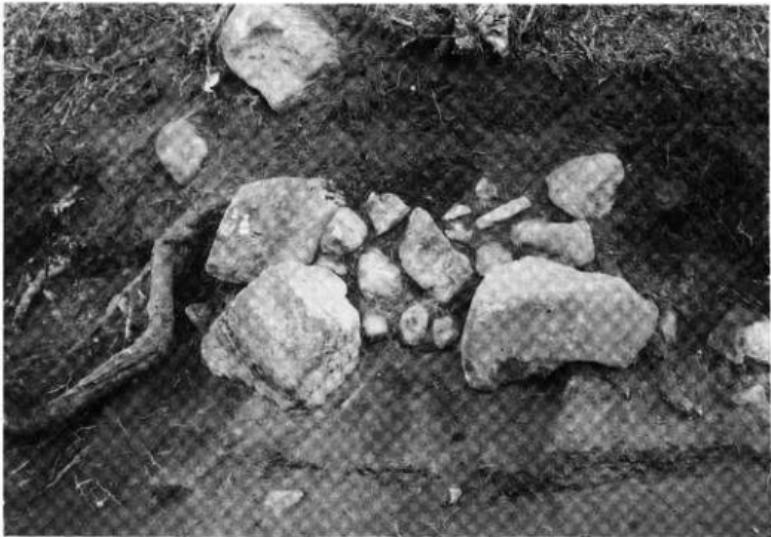
2. 大手門石積遺構検出状況



1. 撈手門完掘狀況



2. 撈手門石積造構檢出狀況



1. 捏手門石積遺構完據狀況



2. 水路狀遺構檢出狀況



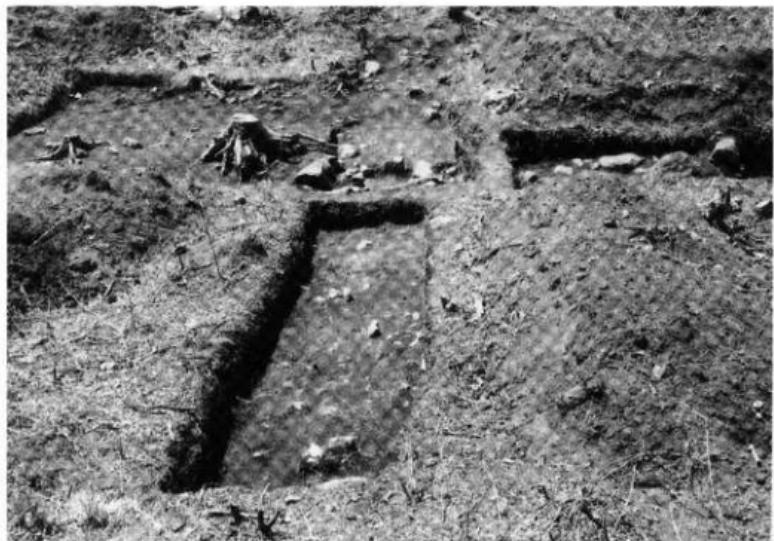
1. 水路状遺構完掘状況



2. 水路状遺構完掘状況



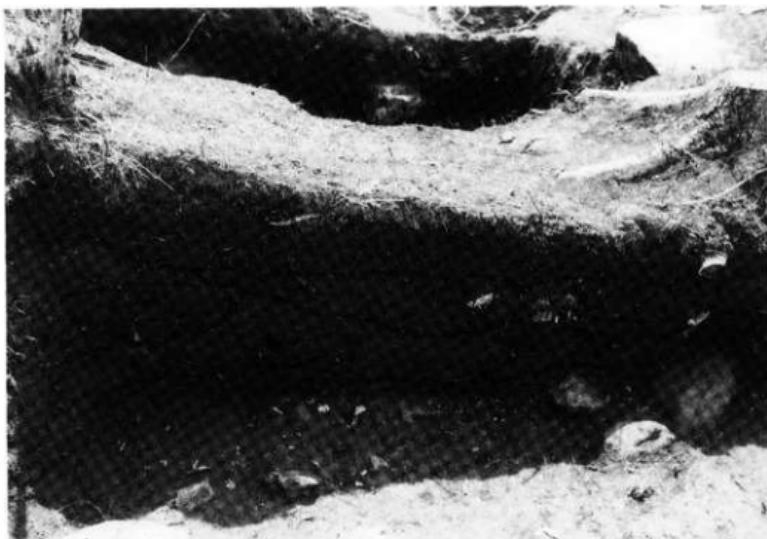
1. 水路状遺構石積状況



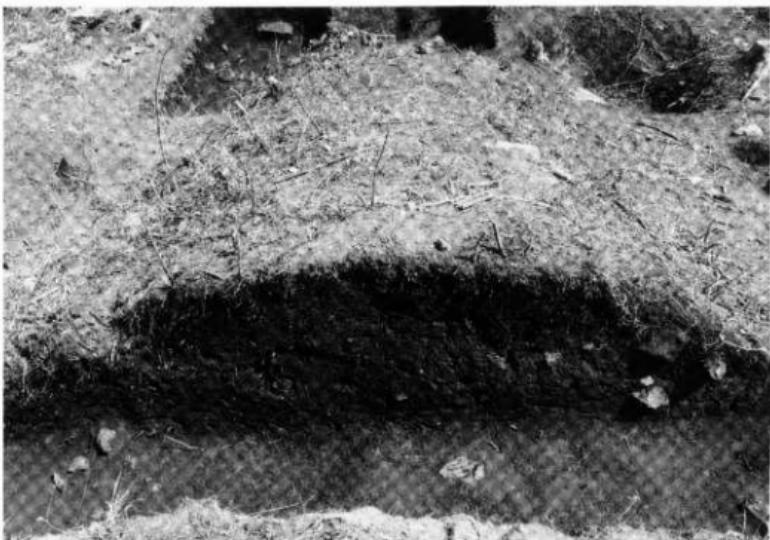
2. 水路完掘状況



1. 肥地区日トレンチ完掘状況



2. 肥地区日トレンチ土層堆積状況



1. 腹跡土型構築状況



2. 腹地区Cトレンチ遺物出土状況(土鏡)



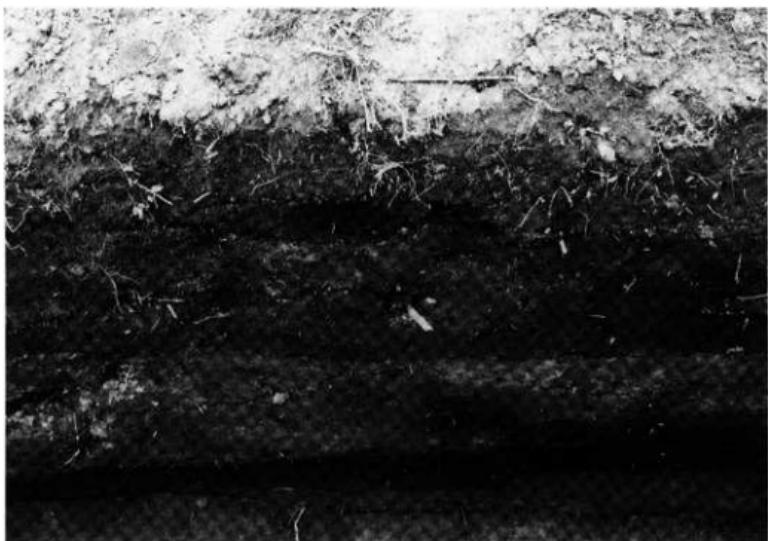
1. 曲輪地区F'-1トレンチ完掘状況



2. 曲輪地区F'-1トレンチ石積状況



1. 曲輪地区F-2トレンチ遺物出土状況



2. 曲輪地区Gトレンチ東側版築状況



1. 木戸地区調査前景



2. 木戸地区Cトレンチ完掘状況



1. 木戸地区土壌構造状況



2. 木戸地区Aトレンチ発掘状況



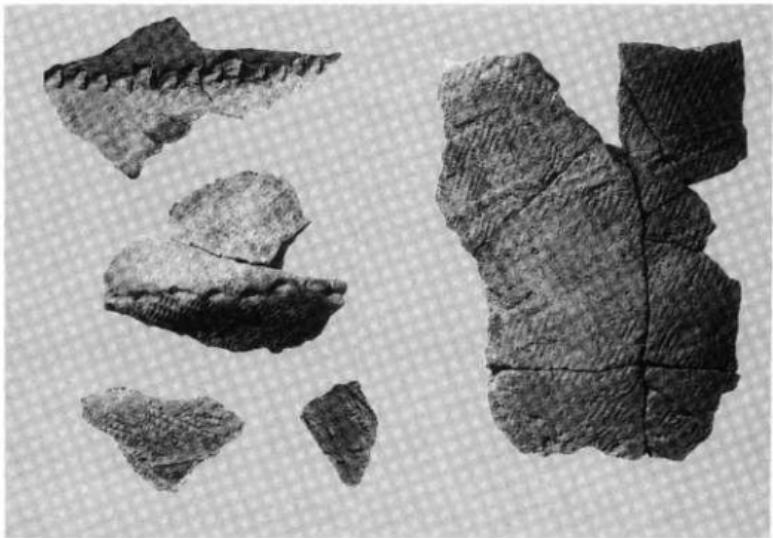
1. 木戸地区Aトレンチ石積状況



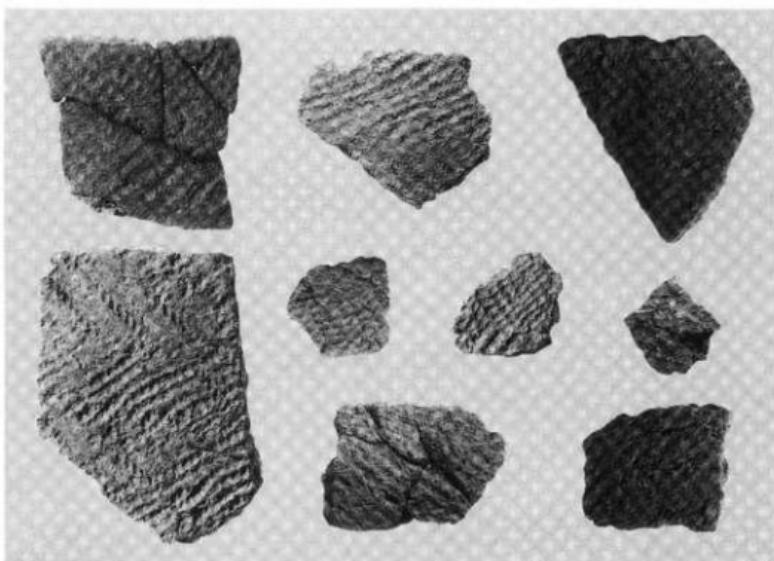
2. 調査風景



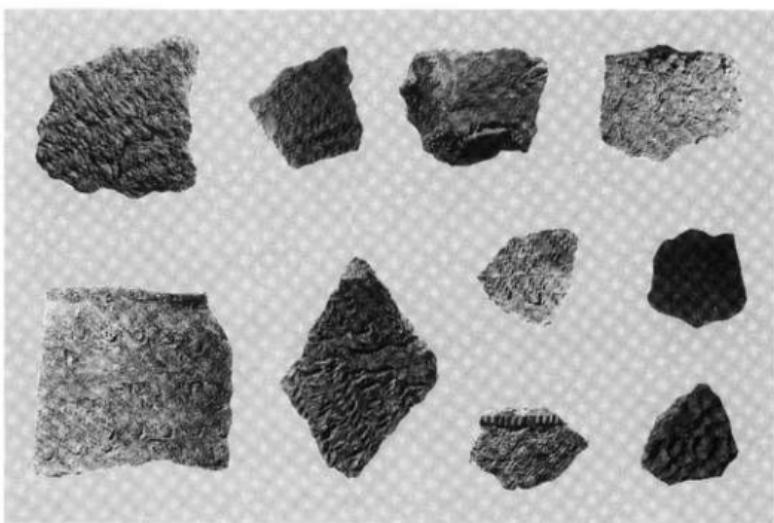
繩文土器 (1)



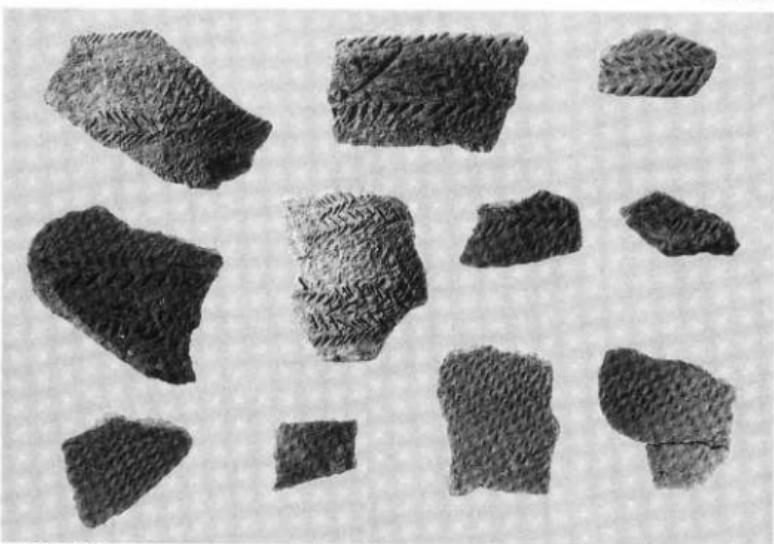
繩文土器 (2)



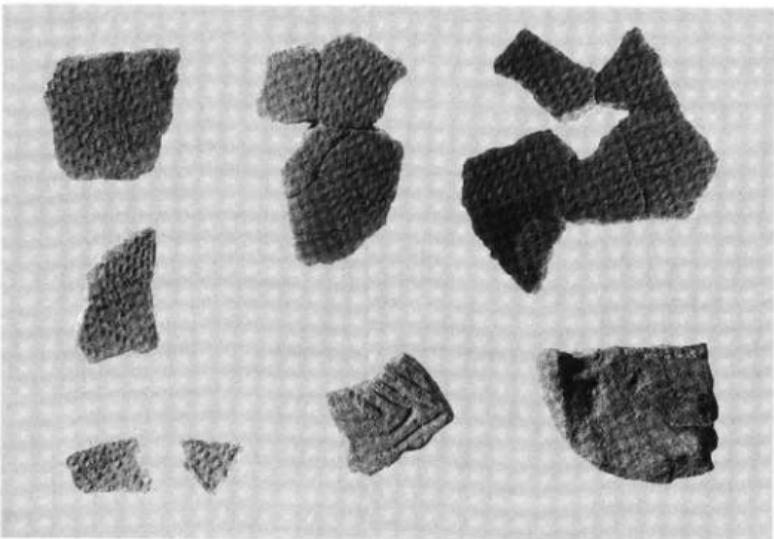
縹文土器 (3)



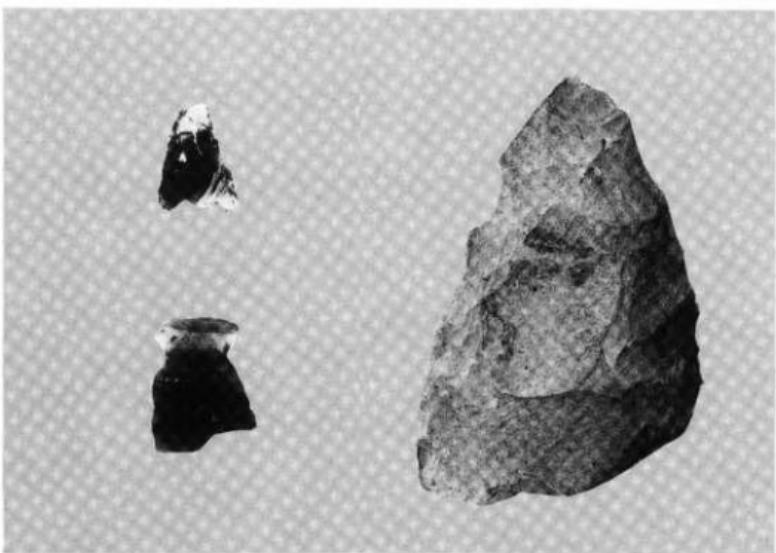
縹文土器 (4)



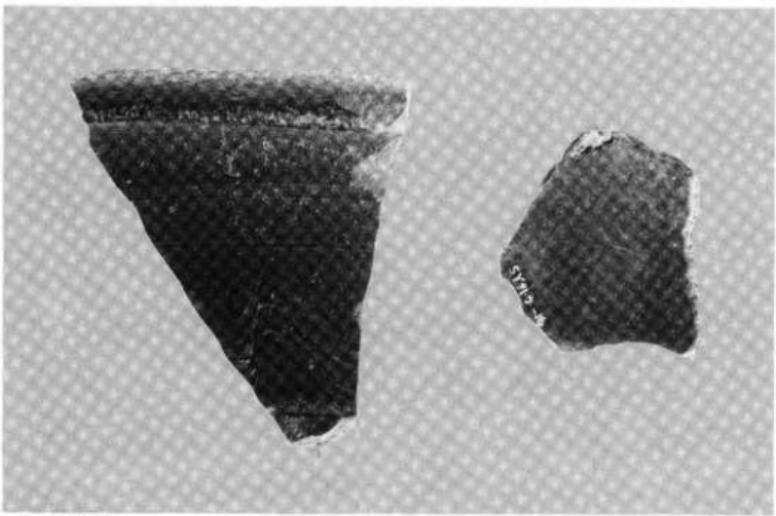
縄文土器 (5)



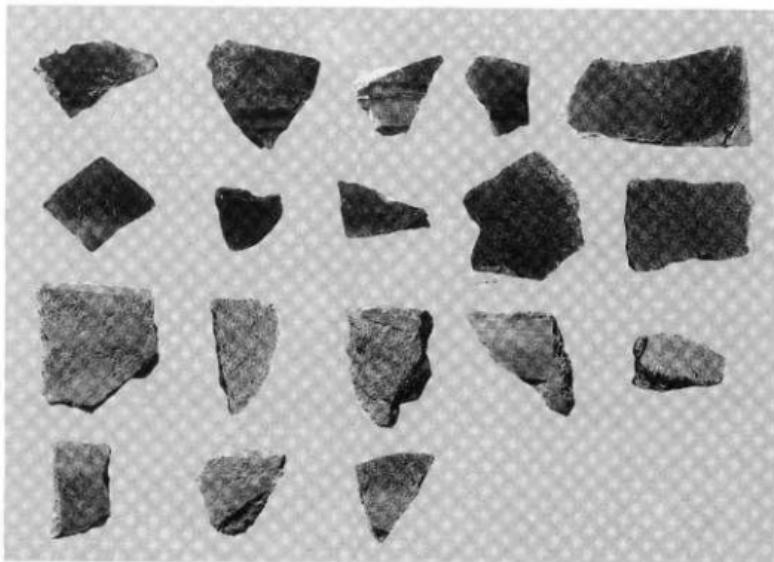
縄文土器 (6)



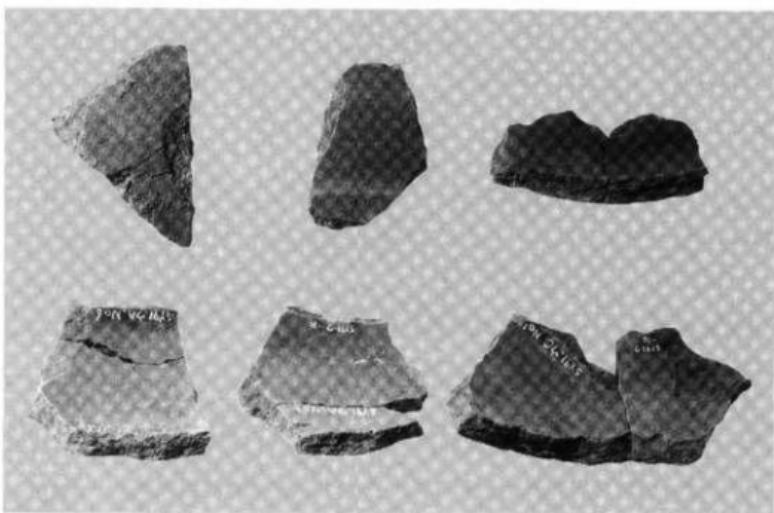
純文時代石器



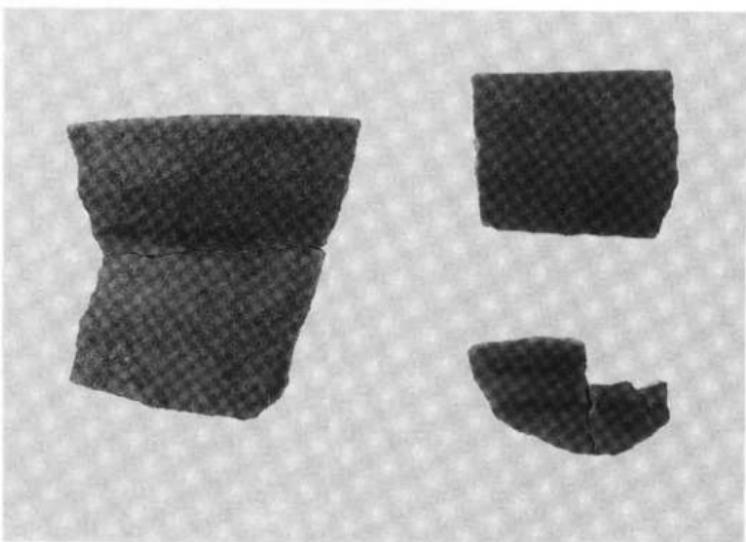
平安時代土器



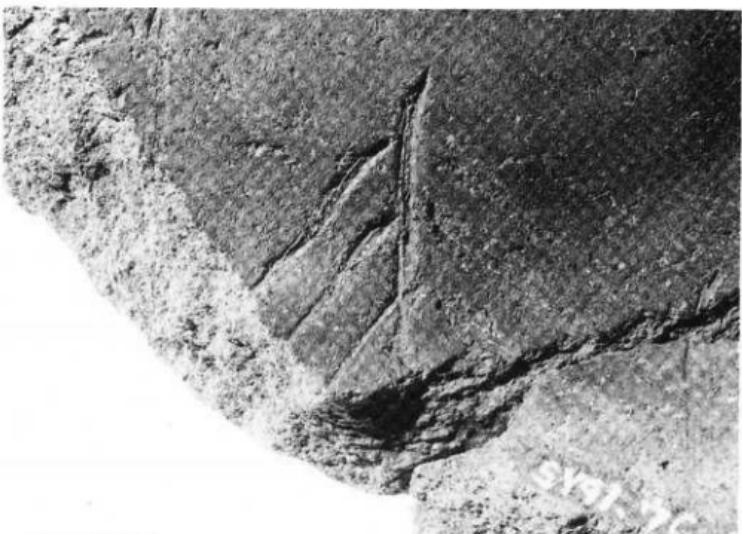
中世土器(土鍋・鉢)



中世土器(土鍋・鉢)



中世土器(土鍋)



土鍋陰刻文様細部